
魔道に全てを捧げる魔道士と全てを惑わすプリンス

黎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔道に全てを捧げる魔道士と全てを惑わすプリンス

【Zコード】

N9471N

【作者名】

黎奈

【あらすじ】

魔道が栄えるマジナシア王国の姫ルミーの元にある日突然使者が訪れた。その使者は何故か自国の王子を知っているかとたずねる。魔道に全てを捧げるルミーにとってはそんなこと知っているはずがない。それを正直に使者に話すと使者は驚き、そして何故か安堵してまた縁があれば来るといつて去つてしまつた。

そのことに嫌な予感を覚えたルミーは魔道大会を開いた。

そして大会後の翌日その使者は現れ、結婚の要請をされる！

何故こんなことに……！？とルミーは困惑した。
政略結婚をメインとしたお話ですが
ファンタジーも含ませていきたいと思つてます。

第一話 大国の使者と魔道大会

「・・・。どちら様ですか？」

私は聞いた。

今、目の前に立っている、
どこかの国の、どういう目的で来ているか不明の、使者に私は問い合わせたのだ。

「ナイトリシア王国の使者です。

あなた様はマジナシア王国の姫君、ルミー様ですね？」

使者は私に聞いかけた。

確かに・・私はルミーという名だけれど・・・。

そして偶然マジナシア王国の姫になってしまったけれど・・・。
いや、そんなことはどうでもいい。

ナイトリシア王国という 大国 がなぜ、マジナシア王国・・小
国に

使者を送ってきたんだろうか？

私にとつてはそこが問題だった。

私の国は魔道には優れているが・・他には何の特徴もない小国である。

魔道のせいか、多少無作法なところもあるが・・・。

それに「これは弱肉強食で成り立つ國、そんなもの作法なんて氣にもしない國である。

魔道しかないよつな小國に一体なんで……？

「確かに……私はルミーですが……一体どんな目的で？」

私は眉をひそめて尋ねた。

「目的とは物騒なことをおっしゃる。では、单刀直入に聞きましょう。あなたはナイトリーシーア王國のプリンス……もとい、王子のことをどう思います？」

使者は本当に单刀直入に聞いてきた。

どう思つて……。

そんなこと聞かれてもなあ。

私は困り果てた。

だって、そんなもの王太子にしてられるほど暇じゃなかつたし。

それに興味関心一切なかつたし。

更に国同士の交流なんてしたことないし。

そんな理由があつてか

「一切興味ありません。というか、知りもしません。今日も今朝帰還してきたところです。」

と、わざとばかり言つた。

「…？」

使者は私を凝視した。

この世に私ような人がいたとは って言ひ田で見られてる・・気がした。

「えー？ 知らないんですかッ！？」

使者は声を張り上げた。

私は「クン」と頷く。

「ほんとにほんとに知りませんか？？」

使者は私になおも聞いてくる。

「はい。何も知りません。」

私は正直に言ひ。

もともと、興味がないからそんなものは覚えず魔道に励んでいた。

「あの、うわさ名高いプリンスですよー？」

それを知らないとは・・・。・ほんとにここきてよかったです

使者はなぜかほつとしたように胸をなでおろした。

「？？」

何故そこでほつとするの？？

私には使者の言動が理解できなかつた。

「ルミー様、突然の訪問申し訳ありませんでした。
わざわざ、私は國へ帰国しますので。
縁があつたらお会いしましょう。」

「・・・はい。・・・・？」

使者は私にペコリと頭を下げてうれしそうに去つていつた。

縁があつたらつて・・・できればこないでほしいなあ。

私は心の中で呟いた。

「あの・・ルミー様、あの者は何故ここへ？」

私の臣下が突然聞いてきた。

「私もよく分からぬ。」

私は一言ではつきり答えた。

よく分からぬのは・・本当だけど・・どうも嫌な予感がする。

言葉では表すことのできない妙な予感。

それはもしかしたら本能がそう察知しているのかもしれない。

私は考えた。

「やうですか。

とにかくで、昨日の依頼はどうでしたか？」

臣下は話題を変えて問う。

「依頼は多少苦戦したけど成功したよ。

じゃあ、私は血室に戻るね、また書類はたまつてこぬでしょ」

「はい、たんまつと。」

臣下は頷いた。

「やつぱりね。

ああ、誰か、代わりを立てようかな・・・。」

私は半ば呟くように囁いた。

執務も嫌いじやないけど大変出し、一人じゃ多いし

それに、さつきの嫌な予感も・・何かあつたら代役ほしいからなあ・

・

と、心の中で考える。

「それなら魔道大会を開けばよろしいかと。

ルミー様もその大会でこの王の座を手に入れられたのですから」

臣下は進言した。

やつぱりそれが手っ取り早いよねえ。

私は呴くように心の中で考える。

この国は魔道で栄えた国として、王は魔道の技量で決まる。

そり・・強い者が人の上にたつ王の座を手に入れられるのだ。

王をきめるには魔道大会が一番効率がよい手段ともいえた。

「じゃあ、それで決まり。
明日にでも大会を開こう。
いいでしょ？」

私はねだるよつて臣下に尋ねる。

「もちろんです。

では早速取り掛かります。」

臣下はやつて書ひてすたすた城の中へ入つていった。

「さて私も・・・・・つう！」

私も城の中へ戻ろうとしたが腹に苦痛が襲ってきた。

あのときの・・・傷がまだ・・・。

「ひーーー

私はしばりへ腹を手で押さえつけていた。

しばりするとやがて痛みはおさまった。

私はなんにでもなかつたように城の中へ戻つた。

そして、翌日、魔道大会が行われた。

わあああああ

と起こる歓声。

ドカーン、ヒュヒュツ・・・ザシユツ

爆発音、騒音・・いろいろな音が会場にこじだます。

私はそれを会場の一一番上の特等席で見ていた。

そして、ついに決勝戦が行われた。

相手は黒髪の男と銀髪の男。

私はその両者を見てすぐにその勝敗の行方が分かった。

銀髪のほうだ。

私は本能がそう語っているかのように自然に察することができた。

そして決勝戦は始まった。

ズドーン！！

この爆発音で勝敗の行方はすぐに決まった。

「勝者、ゼン！！」

審判が勝者の手を掲げた。

勝者は銀髪の男、ゼンである。

わああああああ

と、歓声が沸き起つた。

私も拍手をした。

その拍手の音で歓声が静まった。

銀髪の男は私を見ていた。

私は自分の席から立ち上がり、ふわっと浮き上がる。

そのとき、突如、腹に痛みが走った。

が、そんなものは気にせず、バトル場の真上まで魔法をコントロー
ルし、移動させた。

そして、銀髪の男がいるもとへ降り立った。

「私と勝負してみない？」

私は男に向かつて聞いてみる。

「・・・」

名高いあなたとやれるなら光栄です。
喜んでお受けします。」

男はお辞儀をした。

そして、

わああああああ

と歓声が上がった。

そしてそれを合図に互いに距離を置いた。

そして試合は始まった。

私はすばやく防御の呪文を唱え、発動させる。

このとき、私の髪は青から銀に染まつた。

そして攻撃呪文の詠唱に入る。

相手はすでに魔力を込め、攻撃しに襲い掛かつた。

ガツ！！

防御の結界に相手の「じぶしが当たる。

結界はもろく崩れ去つた。

「舞え！ 悪魔の花！－！」

私の呼びかけの言葉に闇色の花が意思を持つたかのように相手に切りかかった。

シユツシユシユツ

相手はこぶしを使わず体をひねらせて紙一重でかわす。

相手はそれを避けるのに苦戦していよいようだつた。

私は広範囲の呪文を詠唱し始めた。

相手は先ほどの花に苦戦を強いられ呪文詠唱ができるいない。

やがて呪文詠唱はし終えた。

この勝負は相手を先にバトル場から出したほうの勝利。

だから私は害を「えない風系統の魔法を唱えていた。

「風よ、風を巻き起せーー！」

私は声を張り上げた。

「ぶうわああつああーーーーー！」

風が荒れ狂い、いとも簡単に相手はバトル場から追い出せた。

「ルミー様の勝利！！」

審判が声を張り上げ叫んだ。

私は男に手を差し出した。

「あなた、強いね。」

私は言った。

「そういうともらえるとは光榮です。」

男は私の差し出した手をつかみ立ち上がった。

「あなたは・・ゼンだよね。

まさかとはおもつたけど・・・私の従兄妹でしょ？」

私は聞いた。

「気づいてたのか？」

いや、気づいて当たり前か。

その銀髪が何よりも証拠だからな

ゼンは苦笑した。

敬語じゃないせいか、先ほどの雰囲気とはまた違った雰囲気をかもし出しだした。

私の髪は徐々に銀から青に変わつていった。

「私は混血だから。

でも、私としてはそっちのほうがいいけど。

それより、優勝おめでとう。

ゼンには私の補佐、をやってもらひよっ。」

私は言った。

「補佐、か。

それはやるしかないな。

じゃあ、これからよろしくな、・・・・えーと・・・・

ゼンは最後と感つた。

名前・・・かな？

「ルミーでいいよ。

呼び捨てでかまわないのであるから。

どうせ、年はそう変わらないわけだし。」

「じゃあ、よろこへな、ルリー。」

「うわー。」

そうつられて私はゼンと握手をした。

そしてまたもや歓声が起つた。

ついで大会は幕を閉じたのだった。

そしてその翌日、またもやナイトローシーア王国の使者が訪れた。

このとき、ルリーの嫌な予感が本当に当たってしまったことを認めておへ。

第一話 齧迫つきの政略結婚

「え・・・あの、もう一度言つてください。聞き取れなかつたもので。」

私は戸惑いながらも聞いた。

「で・す・か・ら・、

あなた様はナイトリーシア王国の王子、シン様の婚約者にと、候補に上がつているんです。

と言つよりあなた様しかいません。」

使者は私の問いかきつぱりはつきり答えた。

えーーー！？

私がツー！？

こんな私がツー！？

おかしいでしょー！？

私は混乱した。

いつもは冷静で感情など表には出さない。

だが、今回は事が事に婚約者である。

そんなこと勝手に言われたら誰でも混乱するだり。

「その話、断れませんか？？」

私は聞いた。

それは本心からの願いだった。

傍にいたゼンやえ驚いていた。

「断る！？」

「そんなことあつてはなつません！――
とこうが、これほど加齢で誰もが高がらかだとかをあなたは説いてるんです
か！？」

なんともつたいない」とを――――――

使者は激怒した。

「名誉・・ですか？

私は欲しくもないし、うれしくもないし
捨てても もつたいない なんて思わないんですけど

私はきつぱり言い返した。

「もつたいなくないなんて・・・。

あなた様・・恨まれますよ？」

「なんで？？」

「なんでつて・・・。

そうですか・・、あなた様はそこから分からんですね。
つまりですよ、王女、曰くプリンス の隣にいらっしゃる立場
のまですね・・」

「ところのま？」

私は使者に聞いた。

はつきり言ひつと何故もつたいたいのか、何故うらまれるのが全く理解できなかつた。

「誰もが羨ましいと、誰もが望む立場なんです。
それをいらないだとか、うれしくないだとか・・そんな人普通なら
いるはずないんです。」

「……に、いるよ？ そんな人」

私は自分を指差して言ひつ。

「……」

使者はあっけにとられ黙つてしまひ。

「まあとにかく、私は断ります。
なのでお帰りください。」

私はそつ言ひつてゼンを促して使者に背を向けて歩き出さうとする。

「…………いいですか？」

使者は言つた。

私の動きがふとその言葉に耳を傾け止まつた。

「え・・・」

「民がどうなつてもいいんですか？」

使者は脅すような口調で言ひへ。

「どういふ意味？」

私の眉がピクンと跳ね上がつた。

「言葉どおりの意味です。」

使者ははつきり言ひへ。

私がこの縁談を断れば民が脅かされるつて事???

私はそれに苛立ちを覚えた。

「ですから、あなた様がこの縁談、もとい婚約の話を断れば
あなた様の國の民は・・・・・とこいつことです」

「・・・・。

それほどまでに私なんかをその王子とやらはは求めていの???

私は单刀直入に聞く。

「いいえ、王子でなく、私どもの臣下がです。
王からあなた様に文をお送りになられました。
どうぞ、お受け取りを」

使者は淡々と述べ私に文を渡した。

私はその文を読んだ。

婚約を断れば、国を絶望に陥れる。

もし、受け入れるのなら、あなたの国に援助を送りつ。

私はその文を握り締めた。

ようすみにこれは脅迫である。

婚約を断れば実力行使し、国を滅ぼす。それが嫌なら受け入れろ。

と、言いたいのだろう、この文は。

大国でなければ、やれるものならやってみるの一言や二言、言つてやるが、

今回はそういうかない。

だが、ナイトリーシーア王国ならそのぐらいやりかねない。

そつ手感した。

この国は魔道に優れた者が他の国よつあい。

もしかしたらたとえそうなつても反撃は可能かもしれない。

そう考へることもできたが・・・。

だが、それも長期戦となれば話は別だ。

魔力は一時の時間では回復できない。

長い間、少なくとも一日、三日は欲しいといふ。

そうなると一日で争いをやめさせなければならぬ。

それは不可能だらう。

「受け入れるしかない・・・のね。

じゃあ、その代わり、お願いがあるの。」

私は決意した。

仕方ない、受け入れよう。

民の命にはかえられないもの・・・。

「お願い・・・ですか？」

使者は困惑ように尋ねる。

「私はこの国の柱なの。

だから、私にしかできない数々の仕事は山ほどある。
だから、私は婚約してもそれを続けたい。
それぐらいいいでしょ?」

「ですが・・・」

使者は戸惑い反抗しようとしました。

「私よりこの国で強い魔道士はない。

この国は・・魔道士が多いからたくさん事件がおきるんだよなー。
それをおさめるのは誰でもできるだろ?けだし、
魔族を滅ぼすとなると話は別でしょ?」

私ができない仕事のほうが多いし・・それを拒否するとなると・・
この国は・・いや、他の国もどうなるか分からんんだよねー。
そうなると、ナイトリシア^{そつち}王国も危ないんじゃない??

私は使者の言葉をえざきつ、齧すような口調で述べた。

使者の顔は真っ青だった。

ふふふ、やり返し、成功^_^

私は心の中にやっと笑った。

「そうですね・・・。

それは仕方ありませんね。

チツ・・・・断られるよう・・・ましか・・・
分かりました。

それは許しましょう。

では早速あなた様は馬車にお乗りください

「え？ 今から？」

「そうです。
すぐに向かい、王子と対面してもらひ、あひりに移住してもらひます」

「え？？」

じゃあ、じゃあ、早く支度しないと

使者の言葉に私は慌てた。

そつちの用意、はやつ！？

「では一時間ほどお待ちしますのでそれまでにお支度を

「…はい、分かりました。」

使者の言葉に驚きながらも私は頷いた。

代役決めてよかったです・・・。

そのことに安堵して私はゼンに命じた。

「ゼン、悪いけど、執務お願ひね。

私は脅迫されてあっちに嫌々いかないといけないみたいだから。

それと私があっちに行つても私のほうには私しかできない依頼、送つてよ？」

私は、脅迫と嫌々を強調して言った。

もちろん、使者への嫌味である。

「俺が執務を！？」

ちつ、仕方ないか。分かつたよ、ルニー。

王女、お任せを

ゼンは身分の上のものにする作法をして、すばやく去つていった。

おやう、いろいろと報告して置いたのだね。

事の成り行きを。

そして私は支度をしに浴室にこもつた。

じぱりく、いろいろ荷物を詰め込んだ。

すると、腹痛が襲つてきた。

「つづるーー」

以前より強烈な痛みだつた。

つ・・・・ヤバイ・・・傷が前よりひどくなつてゐる・・

だが、今は痛がつてる場合じゃない。

私は痛みをこらえて立ち上がり支度を済ませ使者のもとへ向かつた。

そこには既にゼンもいた。

「手が空いたら会いに行くからな。」

ゼンが心配そうに呟く。

「やうしてくれるとうれしい。

あ、あとゼン、魔法の腕、磨いといてよ。
また手合わせしたいから」

私は微笑んで呟く。

「ああ。そつちも研究頑張れよ。
体もなまらないよう劍の腕も・・な?」

「知つてたんだ?ゼン。

だつたら、お互に頑張ろうね。

だからそのためにもたくさん依頼を送つてよ?」

私は意外だと思わんばかりに呟く。

ゼンの呟つとおり私は剣も扱える。

剣士にして魔道士でもある私はほぼ無敵。

と、いつても過言ではない。

「同じ一族だから知つていて当たり前だ。
ああ、たくさん送るから、覚悟しどけ」

「 もうひとつ

私はゼンの言葉に頷いた。

「お時間です、ルミー様」

使者が私をせかした。

わかつてる と、使者に言つて私は馬車に乗り込んだ。

「じゃあ、後のことばはお願ひね」

「ああ、まかせとけ」

私はゼンに微笑み、ゼンも微笑んだ。

そして私は馬車に乗つてマジナシア王国を出たのだった。

いや、馬車に連れ去られたのだった。・・・かな？

第三話 プリンスの女嫌い

「聞きたいんだけど、何で私のような人を臣下たちは求めたの？？」

私は使者に聞いた。

「王族は国の政治を動かす人です。
当然、後継者は必要でしょう？」

「それは・・そうだけど。
なんでもまた、プリンスとやらに興味関心その他もろもろ知らない人
を候補に入れたの？」

使者は私が真に聞きたい理由ではないほうを答える。

だから私は明確に聞けるよう、たずねた。

使者は・・

「プリンスは女嫌いなんです。」

と、残念そうに答えた。

「は？」

それじゃあ、当然、わたしもダメでしょうか？」

私は拍子抜けた声を出し問い合わせた。

「プリンスは誰をも魅了する容姿をお持ちです。

ですから、誰もが惹きつけられ、誰もがプリンスの隣にいることを望みました。

私たちはそれを知つてて尙候補を探し出し、候補に仕立て上げ王子に会わせました。

候補の誰もが隣を望みました。

つまり皆、同じ考え方を持ちですからプリンスも嫌になつたのだと思います。」

「それ・・自業自得」

私は使者の話を聞いてそう答えた。

だつてそうでしょ。

臣下どもがそういう奴をほいほい候補に上げたから
プリンスは嫌気がさして拒んだんだし。

あ、そりかんがえると、私はその臣下を恨めばいいわけか。

私はそう納得して

「臣下のした行為がやつさせたんなら私は王を恨むより
あなたたち臣下を恨めばいいんだね？」

と、聞いた。

「え・・・。

そ、それは困りますっ！

う、恨まれたりでもしたら・・どんな不幸がふりかかるか・・・

使者はうらたえて困ったよつて顔を出す。

「ふつ・からかいがいがある。」

いや、でも娘むのはほんとだよ。

「いつなったのは全部」「こりのせいだし。

「不幸？」

そんな優しいものじゃ私はおそれられないなあ？

不幸にあってもらつより、地獄にあってもらわなきや・・ふふふふ

「ふ」

私は意味ありげな笑い声を出す。

「ひいー」「～～」

と、使者は悲鳴のような声を出して顔を真っ青となる。

「ふふふ、この際、呪ひぢやおつかなあ？」

私は止めをさすよつて顔を出す。

「の、呪い！？」

使者は裏声を出し失神した。

「あ、この人、本気とした・・・」

私は思わず呟いた。

ふつ、呪いなんてさすがにそこまではしないのに。・・そこまでは。

私は失神した人を見つめ・・・

「うう」

とうめき口元に手を当てた。

きもちわるいい・・・

吐き氣がのどに襲つた。

馬車に酔つたのかもしれない。

失神した使者が目を覚ましたのはナイトリーシーア王国の王城に着いたときだった。

城はマジナシア王国の城より、派手に装飾されており目がチカチカした。
私の国

着いてすぐに城の中を案内された。

外見もすごかつたが、中もすごかつた。

意外に広く、とても長い廊下が続いている。

いろいろなところを案内され、最後に白壁で案内された。

田舎の部屋鳞は王女の血室だと言つ。

部屋は以外に広く、寝室、リビング、個室、トイレ、風呂・・などがあつた。

そして最後にこれを着ると黙つて来た。

それは華やかな青いドレス。

いや、ここではこれが正装なのだろう。

私はそのままのドレスをまじまじと見つめ、自分の服装も見た。

シャツにズボンにローブ。

ズボンのベルトには護符がついており、額には護符用バンダナをつけている。

そして耳につきをかたどったイヤリングに手袋、それに動きやすい靴。

長い白髪の青髪はポニーtailに結い上げている。

手袋で見えないが手の甲には魔方陣が描かれている。

これが魔道士の正装。

やめよう、この姿はいけないんだ。

私は落ち込んだ。

今から華そんなものやかなドレスを着なければならぬないなんて……。

「この服装が私の國の正装なんですが、このままではいけませんか？」

前者　こじまで強制するつもりか、この野郎つ、お前ら叩きのめすよー？（本心）

後者　そこまでするんだつたら、本氣で呪うよー？（本氣で呪いたいと叫び願い）

私は後者のほうを付け加えて呪つた。

そういうと、付け加えた言葉がよかつたのか使者は顔を真つ青にして

「呪われたくないですからそのままでいいです。」

と、素直に叫びてくれた。

効いてる効いてる。

私はうれしくも心の中で呴いた。

「では、対面を。・・プリンス、姫をお呼びしました。」

使者はさつまちて王子の血室をノックした。

「側近、プリンスと呼ぶなら一度と入れない。」

王子？の声が聞こえた。

側近・・・へえ、やはり、ただの使者じゃないんだ。

「すみません、王子。」

使者=側近は言こ直す。

「それもやめろ。」

王子は怒つたような口調で言つた声が聞こえた。

「つい、言つてしましました。

すみません、シン様。

姫が来ました。

対面を願います。」

「・・・」

王子の声は聞こえない。

「・・私は別にしなくてもいいけど」

私はそう呟いた。

「ー?ルミー様!いくつれでこれらたからといっても限度があります!」

撤回してください!」

使者は顔を真っ青にして怒鳴る。

「撤回なんてする必要はないよね？」

私は早く帰りたいんだし。」

私はすました口調で言つ。

「帰りたくても撤回してくださいつ。

何のために私があなた様をつれてきたと思つてるんですかー？
その努力が無駄になりますつーー！」

使者は逆に顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

ああー、頭が痛い。

頭痛までしてきたらこの人はどう対処してくれるだろうか。
酔いがまださめていないのに。

「無駄になつてもいいんじゃない？」

私の知つたことではないし。

第一、あなたの主は嫌がつてゐじやん。

主のために何とかするのが側近の仕事でしちゃう？

私は責めるような口調で言つ。

「や、それはつー？」

使者が言葉を詰まらせたとき、王子の部屋の扉は開いた。

「お前か、30番目の候補者は」

王子は私に向けて言つた。

使者の言つとおり、すばらしく、容姿の持ち主だと思つ。

私はこの人のどの辺に眞が惹きつけられたのが分からぬ。

「・・・・。

お初にお会いになります、ルミーといいます。」

一応、挨拶した。

「はい、30番田です、シン様」

使者は禮をぬけて言つ。

「俺はシンだ。」

シンは私を見て言つ。

シンの瞳は紫色だった。
髪色も紫。

「・・・・・」

「・・・・・」

私もシンも何も話さないから会話？が続かない。

「シン様、

あなた様と接してこられた女性とは一味違う女性を連れてきたので

すが・・

ご感想は?」

使者は沈黙の重い空氣に嫌気が差したのかシンにたずねる。

「めずらしい」

シンは一言、言葉をつむこだ。

「あなたからみれば、珍しいですね、確かに。
私は魔道士ですから」

私はシンの瞳を見て囁く。

「・・・・」

シンは何も言わずに私を見る。

「でも、私もあなたを珍しいと思つ。」

私は言った。

本来なら言わなくてもいいことだけど言つたくなった。

早く帰りたい一身で。

「?」

シンは眉をひそめた。

「私はあなたのどこをみて皆が惹き付けられる事が
すごく私は不思議で思えてならない。」

私はそう言った。

「ルミー様ー！」

使者が叱咤した。

「…」

シンは目を見開いた。

「…俺もわからない」

シンは言った。

自分も分からぬんだ。

私も容姿に惹かれる人の気持ちが理解できないな。

「…・・・」

「…・・・」

「…・・・」

またもや会話がなくなり再び沈黙が訪れる。

カチカチカチカチ・・・・・・

時計の針が動く音だけが響いていた。

力チカチカチカチ・・・・・力チン・・・・・力チカチカチカチ・
・

すると、時計の秒針が動く音から分針が動く音に変わった。
そして再び秒針が動く音がし始めた。

「シン様、ルミー様、夕食のお時間です。
シン様、食事の間に足をお運びください」

使者がそう言ってシンを促した。

「側近さん、あれにきがえなきやだめですか？」

私は聞いた。

「はい。王も来られますから。」

側近は頷いた。

「はあ・・。仕方ないですから着替えますよ。
先に行つてください。着替えたら行くので」

私は深いため息をして声のトーンを落としながら自室に戻った。

それをシンは眉をひそめながらルミーの後姿を見ていた。

第四話 毒と条件反射

私は部屋に戻り、青のドレスに着替えた。

ドレスに着替える際、髪は解いた。

そして、バンダナと手袋をはずす。

すると、手の甲に描かれた魔法陣があらわになつた。

解いた髪は次第に邪魔になつてポニー テールに結い上げた。

すると、前髪も少し持ち上がり、額に小さなクリスタルが見え隠れした。

バンダナはその宝石を隠すためのものでもあった。

額にはめられている小さな宝石を隠すように髪を解き結いなおした。

イヤリングはそのままにして、私は部屋を出た。

そして食事の間に私は向かった。

食事の間の扉の前にあのときにいた側近がいた。

「ルミー様、その手の甲は・・・」

側近は戸惑つた。

「これは・・・あなたには関係ないものよ。
消せないものだし、べつにいいでしょ?」

側近の戸惑いが私の思つこととは違つことだと分かっていながら言い放つ。

「そう・・・ですね。
じゃあ、お入りください。
皆様がお待ちです。
席はシン様の右隣に。」

使者はそう言つて扉を開けた。

食事の間にいた者は皆、私に視線を向けて了。

私はそんなものは気にせず言われた席に着く。

シンは私ではなく、私の手の甲を見つめていた。

「・・・」

「・・・」

シンは何も言わないから私も何も言わない。

しばらくすると、王も現れた。

そして食事は始まった。

皆が食事に手をつけ、おしゃべりを楽しんでいる。

私は食事に手をつけられなかつた。

いや、手につけるものではないと黙つ。

なにせ、毒入りのものだと分かつてしまつたのだから。

私は出された料理を無表情に眺めた。

毒が入つてゐる……。

側近の話が今理解できた氣がする。

王子の隣つてすゞい厄介なものなんだ。
この人

私は今思い知つた。

いや、そんなこと考える必要なんてないし、ただそつ思つただけだ
けど。

毒が入つてゐる事は私、帰つてもいいよね？

ねえ、誰か、帰つてくださいって言つてよ。

こんなもの
ドレス着て、

こんな所
皆が集まる所で

なんで食事会なんて
じんないと

しないといけないの？

私はそのまま、料理を眺め続けた。

「食べないんですか？」

側近が私に聞く。

「・・・。

知つてて聞くの？」

思わず私は言い返してしまった。

「は？」

側近は眉をひそめる。

「私、気分悪いから部屋に戻るね。」

「！！」

「？」

側近は目を見開き、シンは眉をひそめる。

私は呪文を唱え始めた。

瞬間移動という高度な魔法。

これは私が研究に研究を重ねて作り上げたオリジナルの魔法。

それを今呪文詠唱している。

本来ならすぐにでもその場から移動できるが今日はやたらと呪文の効き目が遅かつた。

傷のせい・・・かも。

そう思えて仕方がない。

だが、そう思う余裕がなくなつた。

今、呪文は完成した。

「移動」

私は呟いた。

そしてその瞬間、私は その場食事の間 から消えた。

ヒュツ・・・スパン

到着したのは自分の部屋。

この城で用意された自室だ。

「ひつ」

私は口元に手を当ててひざを突いた。

あ、やばい、吐き気がしてきた・・・

この瞬間移動の欠点は酔つこと。

私は酔いやすいほうだから余計に吐き気がする。

馬車の酔いもいまだにまだうつすりとあつたからそれに追加して気持ち悪かった。

そして突如、腹痛も増してきた。

「くつう　つーーー」

私は苦痛に耐えかねてその場に倒れてうずくまる。

・・ヤバイ・・・意識が朦朧としてきた・・・

視界もぼやけたとき、部屋の扉が　ガターン　と音を立てて開かれた。

「おこつーーー」

そう、叫んだのはシンだった。

シンは私の傍まで駆け寄り、抱き起こした。

「うう　・・・」

急に体が起き上がるから吐き気が増し、腹痛も増した。

「おいつ、どうしたー!？」

「ひーーー

シンが声を荒げて叫ぶ。
そして体を揺らす。

「おいつー・・・・・・ー?」

シンの口は見開かれ、揺さぶられる手が止まつた。

シンには見えたのだ、私の額で光るクリスタルを。

「・・・・・

「・・・・・

しばらく沈黙状態に陥っていた。

その間に吐き気と腹痛は治まつてきた。

それを感じると

「もう、大丈夫だから。放して」

と、私は言つてシンから逃れた。

シンは私を抱き起こした手を私から放し、

次は私の前髪を跳ねのけて、額をまじまじと見つめた。

私はその手を振り払つて立ち上がつた。

シンもそれにつられて立ち上がる。

「お前・・・」

「クリスタルはあなたに関係ない。
もう大丈夫だから帰つてもいいよ。」

私はシンから田をそらして叫びつ。

「・・・・」

シンは黙つたままその場を動かず私を見据える。

帰つては・・・くれないか。

私は言葉で言つのを諦め呪文を唱えだした。

「？」

私は小さい声で呪文詠唱する。

呪文は完成し、私はシンの手に触れた。

すると、瞬時に私の前からシンはいなくなつた。

私が追い出したのである。

開け放たれた扉を閉めて私は着替え始めた。

追い出されたシンは今はまともに動けないだろう。

そんなことを考えながら私は着替えを終わらせ、ベッドにもぐりこんだ。

そしていつしか眠っていた。

夜、気配がした。

その気配は私の部屋に近づいている。

殺氣はなく普通の人が出る気配なのに、その気配を持つ人が部屋の扉を開けたとき、私はその人に刃を向けていた。

「！？」

「・・・」

その気配の正体はシンだった。

シンは目を見開き、しりもちをついた状態で硬直している。

そう、私は今その人を襲つたのだ。

扉が開かれその人が入ってきたとき、

私は飛び起きて小刀を持ち、その人に切りかかつた。

その人はその驚きで隙を作り

私がそれを狙つてバランスを崩させ、しりもちをつかせたのだ。

そして小刀はシンの首に突き刺さる直前にある。

「あ・・・あなただつたのか」

私はそう弦き小刀を下ろした。

今、ようやく私は意識をはつきりさせたのだ。

つまり、今までの行動は 寝ぼけていたための行動 だったわけである。

あ・・・体が勝手に・・・。

この前もそうだつたなあ。

私はこの前のことを思い出していた。

大会が開かれた夜、ゼンが私の部屋に訪れたのだ。

そのときも私が寝ぼけて反射的に襲い掛かつたわけだが・・・。

ああ。

同じ過ちを繰り返してゐし・・・。

私はんー困つたなと考
える。

でも、魔道士やつてると、仕事をやつた夜とか、その前の夜とかに倒して命を上げるつて言つ連中が寝込みをよく襲つてきたのだ。

だから、条件反射つていうのかな。

「の」るは相手に殺氣がなくても襲い掛かってるし、今回も・・・。
おなじように。

「ごめんなさい、つい、体が勝手に…………うう”

私は謝ろうとした。

だが、腹痛が襲い言い訳がいえなくなる。

1
! ?

私は自分が支えられなくなりひざを突く。

カタン

と、小刀が床に落ちた。

私は腹に手を押さえ、うずくまる。

「おこづ！」

シンが叫ぶ。

「「ひ、う、う」」

私は我慢できず倒れこむ。

シンは私を支え、

「おこつ、どうしたー?」

と言つて叫ぶ。

さつさみみたいに痛みがおさまる気配はなかった。

逆にひどくなるばかりだった。

激しい痛みが私を襲う。

「「ひ、ううう」」

激痛に苦しきも加わって意識が朦朧としてきた。

「おこつー?お前・・・ー?」

シンの声のトーンが一気に変わった。

明らかに動搖していた。

さつさとは違う同様だった。

それは驚きだけではなく、惑いと衝撃的な事実が映っているかのような声の響き。

私はその声に一度、目を開き、シンを伺つた。

シンは私の腹部を凝視している。

私は自分の腹部を見た。

そしてそこを抑えていた自分の手も。

「え・・・・?」

私は一瞬痛みを忘れた。

その衝撃的な事実を見て。

それを触れていて。

それは・・私の 血 だつた。

紅い血は私の腹部を赤く染めている。

そして手もまたうすらと染めていた。

そのことに気づいたシンも衝撃的過ぎて凝視することしかできなかつた。

だが、痛みを忘れていたのはその瞬間だけだつた。

「へりー・・・ひ、う

激しい痛みに私は体をよじらか、叫んでしまう。

そのじとこみとしたシンは

「お、おこつ……しつかりしふり……」

と、わけび、私を抱き起しす。

だが、その行動で私の意識は暗転した。

体はシンに預かるようになり、そして首はカクンとのぞけた。

シンはそれに激しく動搖し、すぐに側近を呼んだ。

第五話 混血の女

「ん・・・」

私は意識を取り戻した。

皿を開け上半身を起こす。

「動くな。傷に支障が出る。」

やつ言いて私をけん制したのはシン。

「傷・・・」

私はそつ弦き、毛布で見えない自分の腹部に皿を見やる。

そして毛布を剥ぎ取り、寝巻きから少し覗いて見た。

そこには包帯で巻かれていた。

私はその傷を手でなぞる。

「・・・ふさがってる・・・」

私は思わず弦く。

前は止血で精いっぱいだったが、今はほとんど傷がふさがっている。

だが、その傷の部分が膨らんで腫れていた。

「ふさがつてゐに決まつてますよ、

なにせ、医者が全魔力と最高級の薬草で施した治療でしたから」

シンの近くにいた側近が言ひ。

「ありえない。

魔力と薬草だけでふさがるはずがない」

私は目を見開いて側近に尋ねる。

「そりやあ、輸血もしましたからね。」

「…？」

側近の何氣ない言葉が私を混乱させた。

私は血相を変えて立ち上がつた。

輸血！？

急に立ち上がつたせいか、体がふらつきバランスを崩す。

「おいつ、まだ動くなといったはずだ。」

シンが静かに言ひ。

だが、私はそれどころではない。

「洗面所につれてつて」

私は呟くように言つ。

「？」

「はやく・・・お願ひ。・・・うう！」

「！？」

私は口元を押さえ、吐きそうになるのを防ぐ。

シンがいつまでもつれでつてくれないから

シンから逃れよたよたとした不安な足取りで洗面所に向かつ。

そして洗面所の洗面器のふちを手でつかみ体を支える。

するとそれを待つていたかのように口に吐き気が襲つてきた。

「ぐえっー。」

私はたまらなく苦痛でのどに這い上がってきたものを口から吐き出した。

「！？」

「！？」

二人はそれを見て一悶どうな表情をしただろつ。

「ぐつ・・・・・げほつ・・・・・げほつ」

私は我慢せざ、のびから次々と来るものを吐き出した。

ビシヤツ・・ドバツ

洗面器につぱいに広がるのは赤い血。

「ひえッ・・・・・ぐつ・・・・・げほつ・・・・・げほつ」

私はめいにいつぱい吐き出した。

白かつた洗面器は赤く染まり血で満たされる。

口の中がヌメヌメしていて気持ちが悪い。

う”“ふ、・・・・・どんだけ輸血したのよ・・・・・気持ち悪い。

「うーーぐつ・・・・・ひえッ・・・・・」

のどを襲う吐き気で目が潤む。

次々と吐き続ける私を一人は呆然と見てくる。

「つーーーーーげほつ」

私は吐き出せなければならぬもの全てを吐き出した。

「つ・・・う・・・けほつけほつ」

私はのどの気持ち悪さに乾いた咳をして、洗面器の蛇口に手を伸ばしひねる。

ジャー

出てきた水が私の吐き出した血を全て洗い流した。

ついでに自分の手も洗い、顔も洗う。

そしてタオルで顔を拭き、手からも水を拭う。

私はその動作を呆然と見つめる一人を見た。

「何でつて聞きたい顔してんね、一人とも。」

私は言った。

「・・・」

「・・・」

二人の表情は先ほどから変わらない。

驚いた目で私を凝視しているだけ。

私は右手の甲を一人に見せた。

「！？」

「！？」

「これはね、人間 と 人だけ人間ではないものとの間に生まれた証、なんだよ。」

「！！」

「！！」

「これを、皆は 混血の証 と呼ぶの。」

「！」

「！」

私の言葉に先ほどから表情を覚えるだけで言葉をまるで発さない二人。

「混血者は皆、右手の甲に刻まれるの、この異様な魔方陣を。」

「・・・」

「・・・」

二人は何も言わずに私の右手を見つめる。

私は右手の甲をなでながら

「純血者はこの魔方陣を刻まない。」

変わりに左手の甲に神聖で複雑な魔方陣を刻まれるの。」

と、言った。

私は続けて言葉を発する。

「混血者は人間と人だけどそうでない者のハーフ。つまり、両方の血が私の中に流れているの。

これは誰でもわかるよね？」

私の言葉に二人は頷く。

「で、混血された血は新たな何かを生むけれど、それと同時に両方の血が対抗しようと、拒むの。

人間の血は誰でも受け入れようとするけれどでも、人だけどうでないものは違った。

あらゆるもの拒絶した。
特に人間の血は。」

「……！」

「……！」

二人は強調された人間の血という言葉に青ざめた。

「感づいた？」

あなたたちは私を思つて輸血をしてくれたんだろうね、そしてそのおかげで傷はふさがりかけようとしている。

でもね、私の意思関係なく、私の中にある 人ではない者の血 が拒絶したの。

それがさつきの現象。」

「！」

「！」

二人は目を見開いて私を見つめるばかりだった。

「じゃあ、何故、私の中にある人間の血は拒まれないのか・・・誰だって不思議に思うよね。でも答えは単純。

それは 混血された血は新たな遺伝子を生むから 血 なの。」

「！？」

「！？」

「だから私の血は拒まれない。

ねえ、側近さん輸血のときの血はどういうの？詳しく述べくと・・うーん、人間の血の何型？？」

私は 人間の血 ということを前提に聞いた。

「・・あなた様と同じ A型 ・・です」

側近は言った。

「そう、 そうだね、 それは私の中の血の血液型と同じ。 でもね、 同じ型だからっていう理由じゃあ受け入れてはくれないんだよ。」

だからね、

もう私が危ない日にあって重傷を負つたとしても

輸血だけはしないでよ?」

私は言った。

「あのままだつたらお前は死んでいた」

シンが静かに言った。

「それは・・ありえないな」

私はその言葉に悲しく微笑む。

「何故だ?

何故、 そういういきれる?」

シンは眉をひそめて問う。

「私はいくら重傷を負つても苦しんでも死にきれないの。 私の中にある 人ではない者の血 がそうさせているから。」

私は言った。

ありのままの事実を。

「それは何故だ？」

「さつを言つた言葉ぢおりですよ。

私の中の血がそれを許してくれないってこと。
理由は・・・。私にも分からなーいなあ」

私は言つた。

「・・・」

「・・・」

私たちの会話がなくなり沈黙が訪れた。

何か話そつとしたが急にめまいがした。

「つ・・・・」

視界がグニヤツと歪み、体が前方へ倒れていった。

「おいつ」

シンがそれを受け止め私を抱き上げた。

「無理をするな。」

「・・・・してないよ」

シンの静かな物言いに私は怖氣づきながらも喉くちひり言つた。

シンは私をベットの上にゆっくりと寝かせた。

寝かされた状態はあまりにも気分的に害するから私は上半身を起した。

「。。。朝食をお持ちしました。どうぞ、召し上がってください。」

側近がテーブルの上から私の皿に前においた。

私は一皿見てそれを、

「毒が入ってる。」

と、言った。

「。。。」の中には毒ではなく薬が入ってるんですよ。」

側近は言った。

「昨日の夕食にも毒が入ってた。
そんな怪しいものは食べたくない」

私はそう言って顔を横にそらした。

ぐいっ

すると突然、シンに顔を向かされ、口の中にパンを入れ込んだ。

「ふぬつ！？」　ふぬぬう、ふぬうつ！？」

「たべる」

シンは私の反抗を無視してじつと見つめる。

「・・・。 もぐもぐ」

私は口に突っ込まれたパンを吐き出すわけにも行かず噛み砕いて食べた。

「こきなり、つっこまないでよ」

私は訴えるような目でシンを見る。

「お前が食べないと言い張るから悪い。」

シンは言った。

「言い張るに決まってる。
そんな不得体の知れないものを食べろって言われてたもんだし。
ところで側近さん、昨日の夕食には何が入ってたの？」

私はシンに言い返し、側近に問う。

「知つてて聞くのかと問われましたので不思議に思い調査しました
よ、もちろん。
入っていたのは毒物です。
じわじわと効果を發揮させると言つ特徴を持った有害物でした。」

と、すました口調で答える。

「で、今のパンには何が入つてたの？」

私が疑い深い口調で聞くと

「あなた様が一番お分かりなのでは？」

と、言い返される。

「やつぱり、知られると知つて出したのね。
あなたはその薬を知つて私の口に突っ込んだの？」

私はシンの方を見て聞く。

「・・・・・」

どう解釋していいかわからない反応。

「ま、いつか。

私には生憎この薬は効かないし。
あ、そこにある用紙つて依頼だよね？」

私は無理やり起き上がりつて側近に問う。

「ええ、そうですが・・。

もしかして今から行くのですか！？」

「あなたたちには関係ないでしょ？

私を止める権限なんてないんだから」

私はそう言い、テーブル間で歩いていき、用紙を手に取った。

忠告、傷が治るまでこの依頼は避けて欲しい。

今回はある屋敷に住み込んでしまった 吸血鬼 の退治。

屋敷のものは皆、吸血鬼化してしまい、町に被害が及んでいる。

町はマジナシアとボルダングの国境にあり、宗教都市 と呼ばれて
いる。

注意、吸血鬼はより精神力の高いものの血を好む。

血を見せてはいけない。

忠告を聞き、注意に気を配り、依頼を達成してくれ。

「なるほどね」

私は呟いた。

「お前はしづかへ安靜にしてろ。」

シンは呟く。

「だから、あなたには関係ないでしょ、そんなこと」

私はシンをにらみながら呟く。

「シン様になんてことを…！」

助けてもらつてなんですかッその言ひ草はッ…！」

側近は声を張り上げて言つた。

私はひるむことなく

「誰も助けてなんていつてないし。
勝手に助けたのはそつちでしょ？」

それにわつかも言つたけど私は 瞬殺 でもそれない限り
死に切
れない の。

あの状態が続いても私の血がきつと何とかしてたよ。」

と、言つた。

「じてなかつたらどうするんだ？」

シンが問つ。

「別に。どうもしないし。

私はそんなに 生に執着 してないし。

執着してるのは 魔道 だけ。

私は生涯、魔道 だけに囚くすの。
もともと強制で縛り付けられた婚約だし、
解消しきりとその気になればとくことだつてできる。

「あなたこは民がどうなつてもいいんですか？」

側近が責められて言つた。

「私たち、マジナシア王国の臣をなめられては困るよ。その気になればいつでもできるし、だけどそれは最終手段。こんな大国相手するほどばかじやないよ。よほどのことで狂わされなければ。」

私はそう言ひ放つた。

「・・・」

「・・・」

二人は私の言葉に黙つてしまつ。

「じゃあ、ちよつと、追い出すかもひつよ。」

私はそう言ひて呪文を唱える。

ん？ 魔法が使えない？

私は発動しない技を見て首をかしげる。

あ、イヤリングないし。

そりいえば魔力も吸い取られるようにして・・・。

ちっ、しょうがない。

混血の証を使うか。

「我が血よ、我がいざなう元へ汝らを導け。

混血されし血よ、我の命を聞け。」

私はそう言い放ち、右手を一人にかざした。

シュパン

一人はどこかに消えていった。

「ふう」

私は息を吐き。着替え始めた。

そして門の兵に依頼で出ると云えた。

そして出て行こうとするが、シンが現れた。

「行くな。」

シンは言つ。

「よくそんな体でいえるね。
私がやつたんだから何もいえないけど。
どうしてそんなことを言つの？」

私は聞く。

「お前のよつな奴は初めてだ。」

俺を見た誰もが同じような言動をする。
だが、お前は違う。」

「違うに決まってる。

私は私。

私はあなたに何も望んだりはしない。
それに依頼をこなすのは私の仕事。
ここまで強制される筋合いはない。」

私ははっきり言い切る。

「私とあなたには婚約者と言つ以外のつながりは何もない。
だから、邪魔しないで」

私はそう言って門を叩よひとする。

するといぐいと腕をつかまれた。

「なつー?..」

「行くなといったはずだ」

シンは静かに言つ。

そして私を抱き上げた。

「ちよ、ちよつと、私は行きたいんだけどさつ、
なんていきなりこんなこと・・・」

私は暴れた。

だが、力で押さえつけられ、抵抗は無意味になつた。

「混血の血がなければお前は魔法を使えない。
無理に行く必要がどこにある。」

「だから無理じゃないし。
ていうか、降ろしてよ。」

「降りしたらお前、出て行くだろ？」

「当然、行くに決まってる。」

シンは私を抱き上げ、城の中に戻つた。

そして城の中では甘い空気が漂つた。

「なつ・・・これ・・・は・・・・・・・・・・・・

突如、鼻に甘い香りが染み付いてきた。

その香りが眠りを誘つている。

これは、眠りのお香だ。

「くつ

歯を食いしばり持ちこたえようと我慢する。

だが、体から力が抜け、抵抗できなくなり、意識が朦朧としてきた。

「よく持ちこじたえられるな。

魔力がないくせに。悪あがきはよせ、

後からその反動が来る。」

シンはそう言い、私の部屋に入る。

そしてベッドの上に押し付けた。

「ひ寝」

シンはやわらかひ毛布をかぶせた。

私は眠気に我慢できなくなり田を開じた。

そしてすこづけられたように寝てひつこうとした。

第六話 脱出

私は目を覚ました。

上半身を起こし、部屋を見渡す。

誰もいない・・

そのことに安堵し、部屋を出た。

すると、廊下からたくさん人の気配を感じた。

・・監視役？

そう思えて仕方がなかつた。

私は手に魔力をこめれるか試した。

ホワン

魔力は手に集中した。

よし、回復してゐる。これなら・・・

私は部屋に戻り、文を書き終えると呪文を唱えた。

ヒュッ

私が移動したのは城の真上。

私は風をコントロールしてマジナシア王国に向かつた。

今は夜。

夜は静かで町の明かり一つない。

深夜ぐらいだらうと私は決め付けた。

町外れに飛び降りてそこから徒歩で城に向かつた。

気配がした。

明らかに私を狙う人たち。

私は立ち止まつた。

追い払つたための呪文も詠唱完了していた。

だから早く来いといふ合図である。

私を狙つた奴はその誘いにまんまと引っかかり私の思惑通りに動く。

私は魔法を解き放つた。

「風よ、汝らを戒めろ。」

呼びかけに風は応じ、私を狙つた奴は拘束される。

「朝までそうしてればいい

私は冷たく言い放つとすたすたと城に歩いて向かった。

そして夜明けと共に自分の城へ帰ってきた。

城の門まで行き、

「ゼン、ゼン、来たよ。門開けて」

と、言ひ。

すると、ガラガラガラ と音を立てて門は開く。

私は門から城の中へ入る。

そうするとゼンが出迎えた。

「よく、抜け出せしてきたな?」

ゼンが問いかけるよひに言ひ。

「夜中に抜けてきたからね。

早速だけど、いろいろ用意をせてもうつてもいい?」

「ふあわわあ。朝早く起こしたことを謝ればな?」

「私はお願いにゼンは大きさにあべびをして言つ

「それは『めんね』。」いつも大変だったんだから、仕方ないし。」

私がそう言つと

「はいはいわかつたよ」

と、軽く受け流し、私を抱き上げた。

「なつなにー？ いきなりー！？」

私は戸惑つ。

「ルリーリー、自覚しろよ、お前、顔色悪いぞ。」

ゼンはあきれたように言つ。

「あはは、変な薬飲まされたせいでよ、きつと……」

私は、うとうとしてきて抵抗するのをやめた。

ゼンは私を抱き上げたまま城を歩き、

「何を準備して欲しいんだ？ 寝る前に答えてみよ？」

「んー・・魔力粉・・ふたふくろ・・銀の腕輪・・ふたあつ、淨化の杖、

・・それと・・破邪の剣・・それだけ・・・

「やけに注文多いな。」

心底嫌な顔をするゼン。

「んー、それも承知でお願い・・あと・・・画になつたら起こして・・」

私はそれだけ、言つとまた眠りに着いた。

「つたく、注文の多い、姫君だな

ゼンは嫌そうな物言いで呟くがどことなくうれしさも混ざっていた。

第七話 無自覚

「ルミー様、用意いたしました。畳です、起きてください。」

どこかで聞いたことがある声がする。

でも、言葉遣いが違うような・・・

「んー、まだ眠い。」

私は寝返りを打つ。

「眠くても起きてください、」

また声がした。

私は毛布をかぶる。

「おい・・いい加減にしろよ。

人が敬語でさわやかに起こうとしているのと、わがまま言こやがつ
て・・

おきみつ、ルミーーー！」

怒鳴り声を上げられて毛布をばがされた。

私は眠い目をこすりて起きた。

「んー、あ、ゼン・・」

「あ、ゼン・・じゃないつ。

一発で起きるよ。ルリー。

寝顔は無防備すぎで俺は我慢できません」

ゼンは、はーとため息をついていた。

「我慢?」

私は眠たい目をこすりながら聞く。

「な、なんでもない。

とにかく、用意できたから、ひとつと依頼行って来い。

お前の婚約者、来るぞ。」

「え?」

ゼンの言葉に私は目がさえた。

「お前を探してあちこちひまつぶしててる警備隊がいる。ルリー、見つかるわ。」

ゼンはあきれたようにならへ。

「ヤバイね、それ。

ゼン、起こしてくれてありがと。じゃあ、早速行くよ。」

私はそつと立ち上がり、ドアの方に向かうと、腕をつかまれた。

「おー・・飯も食わずに行くのか?
それは許さないからな」

ゼンは真剣な顔つきで囁く。

「あ、忘れてた。」

私は思って出したよ!囁く。

「おこひ。おれるな、わうこつ」と。
すぐ持つてきてやるから!」と用意してくれた。

ゼンは私をにらみ、部屋から畳座に飛び出しついた。

私が用意し終わるとゼンが部屋に戻ってきた。

「せひ、食べろ。」

「おお、おこしかわ
いだきます。」

ゼンの言葉に早速こすに座つて食べ始めた。

もぐもぐ、あー、おいしく。

「ルリー、お前、いつもバンダナつけてるのか?」

食事中にゼンが聞く。

「……『クン。つん、つかれてるよ』——」

私は食べ物を飲み込んで答える。

「混血の母も手袋で隠してるんだな。」

「つん^く」

私はゼンの皿葉に頷く。

「……『うわあ、やめたかったのに。』
じゃあ、こいつくれぬよ。」

私がそつまつてこいつをかむると、

「お前、懶れるすま」

と、言われ、腕をつかまれた。

「え？」

「自分の体調の悪さくらいこ、自覚しないよ。
病み上がりって顔してるぜ?」

「だ・か・ら・な?」

ゼンが顔を近づけて囁く。

「ん?」

私は首をかしげる。

「依頼終わつたら帰つてこいよ？」

あつちの国より先に。

ゼンは四〇。

「先にじつちに帰つてくるのは何たり前だと思ひやう？」
報告、じつぢだし。・・・？」

私は、何が言いたいんだ?と言つ風な目でゼンを見る。

「はあー」

ゼンは何故か大きくため息をする。

安堵したかのような・・こや、あきれひぬよつた・・

ともかくそんなため息である。

「ああ、そうだな。報せね」つちだもんな。

ならない。

「いやあ、いつでござる。

ゼンは自分に言い聞かすように領を、あきれたよつたため息をついて言つた。

「？・・うん、いつてくるね^ ^」

私は変に頷きため息をついてゼンを不思議に思いながら言った。

「ああ」

ゼンは頷き、私を見送った。

ゼン、頷いたり、ため息ついたり・・・大変だなーー

と、思いながら私は依頼先へと走っていった。

自分が ゼンを大変にしている ことでも気づいていないルニーでした。
そして、そのこと気づいて欲しいゼンでした。

第八話 事の成り行き（シン視点）

「プリンス、いい加減、お分かりになつてください。
あなた様は何度、候補の方と会つてもそれを排除し
だれひとり、婚約者を決めてはいられないじゃないですか
その女嫌い治して早く婚約者をお決めになつてください。」

側近の説教からシンの生活は変わった。

シンは生まれもつて人々をひきつける容姿を持つていた。

それ故に、女はシンの外見に惹かれ、王女の座を狙つた。

シンはそういう女ばかりと接してきたためか、女の存在 자체を嫌悪
していた。

それとともに、女はこういう奴なんだと思いこんでしまつた。

「俺が見てきた女はたくさんいたが誰も最終的には同じだった。
その中から決めるなんていわれても俺は承諾しないぞ、絶対に。
だが・・・。」

だがな、側近。そこまでお前が婚約にこだわるなら、
今まで、俺が接してきた奴とは違う奴を婚約候補として連れて来い。
フン、そんな奴、そう簡単には見つからないだろうがな？」

側近の売り言葉にシンは買い言葉で言つてしまつた。

「はい、分かりました。」

必ずお見つけいたしましょ。」

ですから、シン様、その言葉、お忘れなきよ。」「元気

側近はにやっと笑い、自身ありげに言った。

その頃から側近は他国の姫を調べつづけていたのであった。

それを知らずに、シンが

「ああ、忘れない。この身に誓つ。だから、必ずつれて来いよ?」

と、言い返す。

「はい、お任せのまま」

そう、側近はお辞儀と共に言い、にやっとまた笑つてその場を去つた。

「……。

フン、そんな奴、いたらほんとに見てみたいものだ

シンはひとりでに咳き執務を始めた。

そしてそれから一週間後。

あちこち他国を旅してきた側近がついに帰ってきた。

そしてそいつを見つけたという。

ほんとか？

と俺は始めに疑つた。

側近はその候補を詳しく話した。

それに興味があつたから

「そこまで言うならつれて来い。
俺が気に食わなかつたら・・分かつてゐるな？」

と、脅かし半分で答えた。

すると自身ありげに

「はい、存じております。
では、早速つれてまいりますので・・。」

と、言つて側近はすぐに去つていった。

シンはそれを見送り、

側近がそれほど言つ女・・一体どうひつ奴なんだろつか？

と、興味半分。

女なんて誰でも同じや、所詮、外見に皆は弱いのだ

そんな奴、みたくもない。

と、嫌悪半分。

興味と嫌悪という矛盾された二つの感情が入り交ざつて

複雑な心境にシンはいた。

第八話 事の成り行き（シン視点）（後書き）

えとー、短くてすいません。
シンさんの、性格つてかなり書くのが難しいんですね。。
ですからこの後の話もちょっと・・・なかなか作れなくてですね、
過去編的なものに・・・。
いや、でも、次回からはしつかり書くんでその辺りは許してください。
い。では、また次回。

第九話 吸血鬼退治

私は城を出てすぐに森に入った。

人があまり通らない道はそこしかないからだ。

すたすたすた・・・・

私は早歩きで歩く。

・・尾行されてる・・・・?

私はそう思った。

私と一定の距離を保つて後ろに気配を隠している人がいた。

だが、誰かは分からぬ。

殺氣はないからおそらく襲つては来ないだろう。

私は尾行に気づきながらも宗教都市と呼ばれる町に訪れた。

その町はまさに宗教だらけであった。

町の建物はほとんど教会のような形をかたどっている。

そして行き交う人々は神官のような格好をしている。

・・・ここが宗教都市・・・・。

私はその呼び名に納得がいった。

私が町並みや人々の服装に怖気づきながらもその町の中へ入った。

道を私は普通に歩くと人々は私に視線を向けた。

「・・・」

私はそのことに気づかぬ振りをして歩こうとしたが・・・

目の前に青年が立ちふさがつた。

「ねえ、君、ひょっとして依頼を受けてくれた人?」

青年は私に問いかける。

私は見上げた。

「・・・はい。そうですが・・・・・?」

私はそう答えた。

青年は背が高く私と頭一個分以上身長差がある。

この人、・・・感情を表に出さない・・・。

ふと、私は思った。

「君は今どこへ向かっているのかな?」

青年は微笑みながら問う。

何でこの人は聞くんだ？

怪しい人、どうにも好きじゃないな、こういつ人。

「どうして…。とりあえず宿…ですが…。?」

私は怪訝な顔をして答える。

青年は少し目を見開き

「…。

君は心を開かすのが上手いんだね」

と、言つ。

「あなたこそ」

私は即座に言い返した。

「あはは。

はじめていわれたよ、そんなこと。」

青年はお気楽そうに笑う。

私は青年に問いかける。

「あなたは崇拜者ですか？」

「崇拜者？・・この服装見れば大体の人がそういうだらうね」

青年は苦笑いして答える。

青年の服装はまさに神官そのものだった。

「とつあえず私は私のやることがあるんで、ではまた」

私は青年に背を向けて言った。

「あーごめんね。
引き止めちゃつたりして。
じゃあ、またね、」

青年はこつこつと微笑み、去つていった・・・と思つ。

私はそんな出会いと会話など氣にも留めず宿に向かつた。

その宿で荷物を置いた。

夕食を済まして借りた部屋で準備をし始めた。

移動中、腰に差していた剣を私は手に取つた。

そして混血の証が刻まれている左手の手袋を外した。

剣を鞘から抜き、その切つ先を混血の証に向ける。

皮膚が傷つくか否かといふ今まで近づけ、呪文を唱えた。

「剣よ、混血なる血をもつてして、我的身體におさまつたまえ」

私は短く詠唱する。

すると、

ヒュン！！

剣はそれにこたえたようにその場から消え去る。

すると、混血の証に奇妙な華が刻まれた。

私はそれを確認すると銀の腕輪を両腕につけた。

そして魔力粉の入った小袋をベルトにくくりつけ、腰に杖を隠すように取り付ける。

「よし、準備完了！」

私は眩き、宿を出た。

そして依頼を出した教会へ行つた。

もう夜になつてゐるせいか歩く人の姿は見当たらない。

もっとも、吸血鬼が出歩く中で夜中に平氣でうつりつく人（一般人）がいたら見てみたいが。

教会で吸血鬼がよく出る場所を聞いてみると

「吸血鬼は森によく出るんです。
ちょうど漆黒の泉あたりです。」

今は血の色に染まつていて真紅の泉ですが。」

と、こたえられた。

私はその泉に向かった。

昼間から尾行してくる人はまだ今も続行中である。

そして泉に到着した。

ここか・・・。

私は泉を見回してみた。

泉は小さく月に照らされ水面が輝く。

真紅とは程遠い輝きを放つていた。

「・・・」

私は辺りを見回した。

泉の周りを囲むようにして林で覆われている。

林は月に照られ、影が地面にへばりつくような感じに濃く映し出

される。

ヒュツ

私の真上を通り抜けるような影が一瞬姿を現した。

私は真上を見上げた。

すると、影はいくつも姿を現し、ストンと地上に降り立った。

「吸血鬼・・・ね」

私は呟いた。

何匹もの吸血鬼たちはまるでお化けのように手を前に差し出しながら私に近づいてくる。

「血～”があ～ほ～”しいいい””」

「血～ガ～ホシイ～」

「チヲクレエヒヒ」

吸血鬼たちは声を震わせて襲い掛かってきた。

・・完全に理性の失った下級の吸血鬼たちだ・・・

私は心の中で呟きながらひらりひらりと吸血鬼の爪を避ける。

呪文を小さく唱えながら杖を取り出した。

そして一匹の吸血鬼に杖を突き出して

「炎の浄化」

と、言う。

ブウォン

すると、一匹の吸血鬼は炎を浴びた。

「ウ”ガアア”アツアア」

悲鳴を上げ、吸血鬼は灰と化した。

灰・・それが吸血鬼の最後である。

私は吸血鬼たちを一掃するべく呪文詠唱して大技を叩き込む。

「雷の浄化」

私は天に杖を振りかざし唱える。

すると、

ダン”ダンダンダンダン””！”！”

と、音を立てて雷が吸血鬼たちに降りかかった。

「ルグウォオオオオ」

「グ”ガアアアツアア」

人ではない悲鳴をあげて吸血鬼たちはあっけない最後を迎えた。

皆が灰と化し、あたりは静まり返る。

ふうー

と、少し氣を抜いたとき、

ガサツツ

と、背後に音がした。

慌てて振り向くとそこには・・・。

「・・終わったか？」

背後に現れた人が聞く。

「何で・・ここにいるの？」

私は逆に聞いた。

第九話 吸血鬼退治（後書き）

途中で「めんなさい」。

家の緒事情でしばらくは更新できないかもしません。
なるべく早く更新しますのでどうか気長にお待ちいただければと思
います。

・・ほほ、ファンタジーですね。恋愛はゆるゆると緩やかに進む
と思います。

作者にもこれからストーリーは分かりません。
どうか、ご承知ください。

第十話 姿は魔族、放つ氣は神氣

私は現れた人物を凝視した。

それは声からしても姿からしてもシンそのものだった。

「・・・。

お前が文を残して勝手に行くからだ」

シンはむっとしながら囁ひ。

それ・・・理由になつてない気が・・・。

「だからなんで?」

私は首をかしげて問ひ。

「・・・」

シンは急に黙りこくる。

心配・・で、追つてきたの・・・??

「今のは追うきつかけみたいなものでしょ。
追つてきた理由は何??」

私は聞く。

「お前は無茶をするからだ」

シンは私を見つめて言った。

それも理由になつてないと思つけど・・・。

つまり、無茶するなつていう牽制だつたわけ?

「無茶して欲しくないから尾行してたの??」

私は单刀直入に聞く。

「 - - - 」

シンが何か言おうとしたとき、私の背後に何か来た!!

「危ない!!」

私はその気配を感じ取り、すぐさまシンを風の軌道に乗せ、力任せに突き飛ばした。

ヒュー・・・ドガツ・・・ドテツ

シンは突き飛ばされ離れた所にある木に背中をぶつけた。

そしてそれと同時に私は大きな影に覆いかぶされ

がぶつ

つと、首筋をかまれた。

「つーー。」

血が吸われるのを感じて思わずためく。

だが、されるがままの私ではない。

『 我の鞘、今、剣を我が元に！』

私は心の中でそう叫んだ。

ウ ウォン！

手元に剣が召喚される。

ザシユツウウーー！

そしてその剣を握り締め私の首筋に牙を刺す奴をなぎ払った。

「くつーー？」

相手はつめき数歩退いた。

「ーーー？」

私は目を見開いた。

そこには毎間に出会つた青年の姿があつたからだ。

「まさか・・僕の牙を食らつてついかるとはね・・・」

青年は腹部を抑えて言った。

・・吸血鬼だったのね！！

「あなた昼間の・・・

私は青年を見つめて呟く。

「そうだよ、あれも僕さ」

青年は平然に言つ。

私は吸血鬼の血筋を思い出した。

吸血鬼には一つの段階があつたのだ。

ひとつは先ほど襲つてきた理性の失った血を求める下級の吸血鬼。

もう一つは青年のような理性があつて昼間も大丈夫な上級の吸血鬼。

だが・・上級の吸血鬼も理性を失うことがあつたはずだが・・。

「油断・・・した」

私は顔をゆがめて言つ。

首筋から血が滴り落ち、体はしびれ始めてきた。

「・・・美味しいね・・君の血は・・もっとチョウダイ」

青年は田の色を変えていった。

・・理性を失つた！！

青年は言つたと共に私に飛び掛ってきた。

私は剣を構える。

青年は冷氣を放ちながら突進してきた。

ヒュウワーン・・シュー

冷氣を剣で防いだ。

そして次の防御に転じようとしたが遅かった。

ドン！・・・ガシツ

私は胸元を突進され地面に倒れこむところを青年に腰をつかまれ首元に顔をうずめられた。

ペロリ

青年は私の首元をなめ上げた。

「ひつ！・・・」

私は体が一瞬震えた。

・・はなれなきやつ！－

私は剣を使ってもがいた。

「ティコウスルナ、ソソラレル——」

青年は言った。

いや、もはや青年は青年ではなくなっていた。

理性のあつた上級の吸血鬼から理性の失つた上級の吸血鬼となつた
のだ。

ガシッ・・・ブスッ

青年は片方の腕で私を縛り付け、剣の持つ腕に牙を刺した。

カラソカラソ

手に力が入らなくなり剣を地面に落としてしまう。

すると、青年は私をつかみ上げ首筋に食いかかってきた。

「ぐつ・・・くつ”ううつ

足が浮き、つるし上げられる状態となつた。

彼は私に圧力をかけてくる。

・・ヤバイ・・血が・・・

私は抵抗を試みたが体に力が入らなかつた。

こうしている間にも青年は私の血をなめ上げていく。

ペローリ・・・ニユルニユル

「う　　うう

体に突如異様な痛みが押し寄せてきた。

だが、次の瞬間、彼の圧力がなくなつた。

ズゲツ・・・ズザアアアツアア！！

彼は何者かに蹴り上げられたのだった。

彼の力がなくなり私の体は解放された。

そして私は地面に倒れこむははずだつた。

だが、倒れこむことはなかつた。

ガシッ

私は倒れこむ寸前誰かに腰を支えられたのだ。

青年は私から離れたところでうづくまつている。

私は支えてくれた者を見上げる。

月に照らされ、その者は姿を見せた。

その姿は異様で妖艶なものだった。

その姿に私は見覚えがあった。

「・・アシュラ・・・！？」

私は思わず、凝視し、名を呟くように言った。

アシュラ・・それはかつて自分が昔、対峙した奴だった。

「魔族つ！？」

シンが遠くから叫ぶ。

そう、まさに姿は魔族そのものだった。

人の姿だが耳はとんがってるし、目も蛇のよつた目つきで色は金色。顔つきも人の姿も格好よくてクールだが、髪は逆立ち頭には魔族の鎖がある。

そう、姿そのものは魔族だった。

だが、魔族が本来持っているはずのない氣をその者には感じられた。

それが・・神氣。

字の「」とく神の放つ神聖なる氣。

それをその者は放つのだ。

この際はつきり言おう、そいつは神魔だ。

神族と魔族の間に生まれた混血の異存。異なる存在

私はそいつを傭、剣に封印したのだ。

本来、破られるはずのないもののはずだが・・・

「アシュラ・・なんで・・・・・」

私は問いただす。

フンフ

混血の神魔・・アシュラは鼻で笑い、続けざまに

「はっ、なにをほざくつー俺様と互角で殺り合やい、
しかも封印と契約までさせたお前が、
たかが理性の失った上級のウ”アンパイアなんぞにやられるとこな
んて

誰が見てやるものか！」

と、早口で言ひ募る。

「・・・・・」

私はその言葉に絶句する。

・以前はこんなキャラじゃなかつたよ<うな・・・

私は関係ないよ<うなことを思つ。

「この俺様とだぞつ！？俺様と！－
なのになんだ、このザマはつ！－
こんなザコに苦戦してんじやねーよ<つ」

アシユラは姿にも似合わぬ口調で言つ。

・・ザコ・・か・・

言われてみればそつである、魔族や神族にとつては。

「オオーーーシンキ・・シンマ・・・ホシイイーーチラクレエエ」

元青年・・理性のない吸血鬼が言い襲い掛かつてき^たた。

「・・・」

アシユラは人間には発せぬ呪文を短く唱えた。

そして私を支える反対の手を相手にかざし炎で攻撃した。

ぼすつぼすつ・・・ブオオワアア

相手は炎に焼かれた。

「ル”ウウ”ウウウ」

相手は悲鳴を上げる。

だが・・まだ立ち上がりゆづくつ押した動きで「あらに歩み寄つて
くる。

「チツ、しつこザコだな」

アシコラはそう言つて捨て数歩私を抱えて退く。

そのとき、私の首筋が熱くなつた。

「フーーー

移動の衝撃で少し痛みが回つてきたのだらつ。

私は小さくためぐ。

そんな私を見て

「魔デモノスレイヤーを滅ぼせし者と呼ばれていても
所詮、人間だな。モロすぎる」

と、アシコラは吐き捨てるように呟つ。

「チラオオオ、チラオオクレヒ

理性のかけらもない吸血鬼はしつこく罵つて歩み寄る。

「ザコはザコでも上級だな。

理性がないだけそれでもマシか。

厄介な奴だ、だが、この俺様には足元にも及ばない。」

アシュラは不敵な笑みを漏らし、

「塵と化せ、ザコがつ！！」

と、言い捨て、手を振りかざし炎を何発も直撃させる。

「ブオ”ウ”ン、ブオ”ン、ブオ”ウ”ン・・・・・・・・！」

「グガアアツア！――！」

吸血鬼は燃え上がり、最後には・・

サラアー

と、灰・・いや、塵と化してしまったのだった。

シーン

吸血鬼が滅び、シーンと静まり返る。

「・・魔族・・なのか？」

シンが始めに沈黙を破った。

アシュラは声をするほうに視線を向けた。

「混血だよ・・アシコラは」

私は呟くように言った。

「俺様は魔族だつ！人間の癖して何をほやへつー！？」

私の言葉にアシコラは不満げに呟いた。

「私は・・人間じゃない。
・・、シン、あなたも・・氣をかぶじる」とができる・・でしょ・・？」

私はアシコラの問いかにあつむつと言ひ放ち途切れ途切れに呟いた。

「ひーーー！」

アシコラは言葉を失い

「ああ、感じる。

そこつからば神氣が漂つてこむ」

シンは答える。

「アシコラは神魔だよ・・」

そして・・私の剣の半身でもある・・と後に付け足して私は呟いた。

「剣の半身・・・？」

シンはその言葉に眉をひそめる。

「はつ、嘘だろつーーー？第一お前は俺様を頼つてたか！？」

アシュラは叫ぶように問い合わせる。

「頼つてない・・

むしろ、あの頃のアシュラは私を・・敵視してた」

私は今もねと付け足して言つ。

「当たり前だろッ俺様の自由を奪つたのは紛れもなくお前だからな
つ！」

アシュラは言つた。

「自由・・アシュラはあれを自由だと思つてたんだ・・へえー・・

私は聞くような疑つような・・そんな言い方をした。

「つー？」

アシュラは黙りこくる。

封印する当時アシュラは町で暴れてた。

神氣で満ちた自分を嫌になつてか、

自分が神魔だということを認めたくなかったからなのか、

それとも魔族として今まで生きてきたからか、

もしくは周囲の嫌悪が嫌だつたからか、

どれにせよ、不満ばかりの感情で

うつぶんばらしに町にやつ当たりしてたことには間違いなかつた。

「・・あ、ああ、あの時は自由だつたさ・・なんでもいいようにド
きたからな。」

アシュラは焦つたように言い直して言つ。

「まあ、それはともかく・・私はそろそろ帰るから・・」

私はそう言ってアシュラの腕から抜けようとした。

だが、アシュラは放さない。

「・・・放してよ・・」

私は言つ。

「はつ、動けないくせに強がる奴だな。」

アシュラは抱える腕に力を強く込めた。

「つーーー」

その力が強すぎて痛みを更に強くした。

「・・・

はつ、もろい奴。

そんなんじや、わつきのザゴビモニやられるな」

「ひなきのザゴビモニやられるな」

アシュラは私を鼻で笑う。

「つーー何で放さない？」

私は聞く。

「お前、俺様をなめんなよ？」

アシュラは不敵な笑みで質問を回避しようとした。

「なめてない。

自称、魔族・・でしょ？じ・しょ・う。
だから何で放さない？

これくらい自力で動けるし。」

私は自称を強調して言つ。

「自力でだとお！？雑魚にやられる奴が強がるなよ、クズが！」

アシュラは鼻で笑う。

「・・・・・クズ・・・ね、ひさしぶりに・・きいたな・・それ。
あ、シン、一人で帰つてよ？」

私は一度宿に戻つて報告とプラス、城で報告もあるから

私はアシュラの言葉を聞き流してシンに言つた。

「ああ」

「一ヶ月はあつちにいるから」

シンの領きに私は再び言った。

「じゃあ、かえろう・・・」

「オイ」

私がアシュラの腕を解こうとしたらアシュラが止めた。

「ん?」

私は聞く。

「おまえ・・クズつて・・・。」

アシュラは言ひにくそうに言ひつ。

「その話はあとで。
いいから放して?

私、まだ魔力はあるし。」

私はそう言つてアシュラの腕に力を込める。

「人間の魔力で何とかなるものかよつ」

アシュラは吐き捨てるよつに言ひつ。

「だから・・人間じゃないって。
じゃあ、私、急ぐから」

私はそう言って魔力粉を取り出し自分に振りかけた。

フワーン・・ホワーン

魔力がみなぎる。

私は瞬時にアシュラから抜け出して飛んだ。

「なっ！？」

アシュラが驚いたような声を出す。

「シン、じゃあ、またね」

私はアシュラを無視し、シンにそう言って振り返りもせず宿に向かって飛んだ。

第十話 姿は魔族、放つ氣は神氣（後書き）

次回はこの続きです。

今回も途中になってしましました。すいません。
でも、シンの一件は片付きました。

次回はアシュラ視点も混ぜてお送りします。

第十一話 無自覚な無茶、封印の過去

私は宿に戻り、宿のオーナーに依頼達成の報告を頼み、借りた部屋に戻った。

荷物をまとめて剣を手に持つた。

先ほど泉においてきた破邪の剣だ。

あれは持ち主の元へ勝手に戻るという特殊な剣だ。

それ相応の代償はあるが。

・・また・・封印か・・

そう呟きながらのを抑えながらアシュラのほうをみた。

「・・・

アシュラは壁際に背をもたれさせながら腕を組み、私をじらむように見据えている。

・・・さまになつてゐる・・・

腕を組むアシュラをみて私は呟きになつた。

容姿がすば抜けてるせいか、意外にもそういう体勢はけっこうカッコいい。

性格を抜きにすればの話だが。

・・。

それはおいといて今は封印に集中しなければならない。

私はアシュラと向き合い剣をアシュラに突き出した。

「・・また俺様を封印するきか、貴様」

アシュラは私に鋭い視線を刺し壁から離れた。

・・・。お前から貴様になつてゐる・・・

不意にそつと思つた。

「当然するに決まつてゐる。

ほつとけば何をするかは分からぬ。」

私はそう言い放ち、魔力を手元に集中する。

「はつ、助けられていてよく言えたもんだ。
この俺様がいたから今があるんだぞ?」

アシュラは私をあざ笑うかのように言ひつい。

「じゃあ、助けたことを後悔すれば??

私は冷たく言い返し、呪文を唱え始める。

「なんだとおおーー?」

アシュラは怒りの混ざった声を出す。

私はかまわずに詠唱し続ける。

ガシッ！……ドンッ……カラーン……

「ひーーーー?」

私は一瞬何が起ったかわからなかつた。

だが・・首からする鈍い痛みとたたきつけられた背中の痛みから
今の状況を察することができた。

私は今、アシュラに首をつかまれ背中を壁にたたきつけられたのだ。

私の目の前には私をたたきつけたアシュラ本人がいる。

足元には手から落ちた剣がある。

「・・・」

本来なら呪文詠唱途中で攻撃されても迎撃できるはずなのだが・・・

アシュラは私を見つめ、噛まれたところを首をつかんだ手でわざと
触れた。

そしてわざと力を加える。

「う”・・」

言つまいと我慢したが体はそうもいってはおれず、つめき声がもれてしまつた。

「はつ、今ので分かつただろ?」

貴様は俺様を封印できず抵抗もできないんだ。
貴様は今の自分を理解できているのか??」

アシュラは首をつかむ手の力を緩めて言ひ。

「理解・・してるけど・・・?」

・・今の自分?・・アシュラは何を言つてゐるの??
・・そんなの・・自分が一番知つてゐるのに・・・

私はそういう意味も含めて言ひ。

はあー

普通なら誰もがそれを聞いてため息をするだろ?。

シンもゼンもそういう反応を示したのだから。

だが・・。

「!・・・・・つたく、貴様、俺様を何だと思つてゐ?!!?

俺様は魔族だぞッ!!?

魔には過敏に反応をする俺様が気づかぬわけがないだらう……」

アシュラは逆切れした。

いや、キレた、といつべきかもしれない。

・・何に気づかないわけないって言つて居るんだろう? アシュラは。

「気づく? 」

私は鸚鵡返しに聞く。

「しつりぱつくれるなあああつ! ! !

貴様の体がどれだけ限界なのかは見れば分かる」とだらう! ! !

それとも俺様をなめてんのかあああ! ?

アシュラは耳元で怒鳴り散らす。

限界? ?

それでもない気がするけど。

それにナメてるつて? ? 思い込み激しき。

「限界? ? ? ナメる? ? 別になめてなんかはないけど? ? ?

私はいかにも不思議と囁ひの口調で囁ひ。

「くそつ、貴様は自覚もないのかッ! !

とにかく、貴様は俺様を封印しようとするとなッ! !

アシュラは叫ぶ。

「何で？」

私は聞く。

封印しないとまたアシュラはすき放題やらかすのよ。
何かに縛られない契約があつてもうつぱんぱいにいかをくわ
すくせ！」

そんな思いも込めて。

「いいから、封印するなッ！
とはいっても今の貴様はできないだろうがな。
それはいいが、もう貴様はあとはあの城に帰るだけだな？？」

アシュラは諦め混じりに聞く。

「やううだけど・・なんで聞くの？？」

私は警戒心むき出しにして聞く。

「俺様が連れてつてやるからだつ……」

「…？」

アシュラの意外な一言に私は自分の耳を疑つた。

「フン、」の俺様がお前を連れてつてやるんだからな。感謝しそう

アシュラは勝ち誇ったかのようになつた。
どこが勝ち誇っているかは全く分からぬ私だが。

「誰も頼んでない。」

私は言つ。

「ハアア！？俺様が、この俺様が運んでやるつて言つてんにまだ
言つつかつ！－
運んでやるつていつてんだからおとなしく従つて感謝しやッ－－－！」

アシュラはキレる。

「おとなしく従ういわれはない、あと感謝も

私はアシュラの手を見て言い切る。

「－－－！」

アシュラの眉はピクーンとはね上がり、続けざまに

「ああーもういい－－

とにかくお前はもう黙つてやッ－－－！」

と、叫び散らし、私を強引に抱き上げた。

「なつ－？ひよ－－？－！」

私はアシュラの意味不明な行動に頭と体がついていけなかつた。

だが、体も心も拒絶していることは確か。

私は必死で抵抗する。

だが、アシュラは私を力任せに押さえつけ私の荷物をひょいつと魔力で持ち上げた。

「なつつーーー！へビうある氣ー！？」

パニクッタ頭で何とか問う私。

「ハアアー！？、決まりきったことを聞くんじゃねーよつー馬鹿がツ」

アシュラはそつぱんつと

「 - - - - - 」

人間の発せられぬ呪を唱えた。

すると、

グウ”オン”ンン・・・

と、鈍い音が発せられ、空間が歪んだ。

視界も歪み、体が不安定になる。

頭もカナヅチで殴られたように割れるような頭痛がした。

だが、それも一瞬のこと。

すぐに空間のゆがみはなくなつて体は安定した。

だが、風景は部屋の風景ではなくなつている。

「ほおお、お前、そんな体でよく意識が保てたな?
普通、今まで人間は少なからず失神するはずだが。」

アシュラは何か奇妙なものを見るような目で見る。

——人間じゃない

私はそう言いたかった。

だが、体が言うことを利かない。

体に力が入らなくなり何も考えられなくなりつつある。

「おいつ、どうしたつ！？」

アシュラが叫ぶ。

・・まだ・・氣を失つちゃだめだ・・・
・・まだ・・・こいつに・・・身を任せては・・・
・・・・意識だけは・・・氣を・・許しては・・・だめなのに・・・
・

私は最後まで歯を食いしばり自分の朦朧とする意識の中で抵抗した。

それを察したアシュラは、ふと笑い

「強がるな。自分の体に身を任せろ。

俺様を・・俺を・・信用しろ」

と、私に向けて言つ。

優しい口調だが言葉は命令口調。

表情からして心から言つてくれてるんだと頭では理解しても私は信
用できなかつた。

最後の最後まで私は気を許はしなかつた。

私は抵抗しようもないいろいろなものに打撃を受けて意識を失つた。

アシュラは最後まで自分に気を許さうとはしなかつたルミーを見つ
める。

・・・ここまで警戒されるとはな・・・

そう思いながら自分の腕の中にルミーを見ていた。

気を許してもう一つは簡単ではないことは自分でも分かつっていた。

こんな性格だし、ルミーに**ルミー**に對していろいろと傷つけたりといった前科が以前にあつたという過去もあつた。

ルミーに對しての態度の変わりよつは自分が封印されるまではなかつた。

もつとも、封印されるまでは人を、いや、生きる存在全てを憎んでいた。（今も）

アシュラは封印される前のことを思い出していた。

アシュラは今まで魔族として生きてきた。

だが、いつの日からかその身に神気が溢れ、魔族の持つ邪悪な氣、邪氣を放つことはなくなり、かわりに神気が放たれるようになつた。

本人の意識関係なく。

そのせいか、周りの魔族からは忌み嫌われ続け、

魔族と対立関係にあり、世を統べる神族からも見放されていた。

そのせいか、アシュラは自分を蔑み心には不満や怒りが満ちるばかりであった。

その怒りや不満がついに町の人々に害をもたらした。

人々にやつぱりすることによってアシュラは快感を覚えた。

快感を覚えるとそれはやめられなくなつた。

そこで止めたのはルミーだつた。

この頃のルミーはアシュラと同じ人々から穢まれて生きてきた者であつた。

そのせいか、ルミーの言葉には棘があり、今以上に冷たかつた。

「あんたがいると人が死ぬからやめて」

ルミーがアシュラに言つた最初の言葉だつた。

「フン、そんなこと知るかよ、俺がどうしようと俺の勝手だ」

このときのアシュラも自分のやりたい放題のことをしていた。

「じゃあ、私も勝手にやるから」

ルミーはそう言つていきなりアシュラに攻撃を仕掛けた。

「なつ、人間風情が俺にたてつくのかつ」

アシュラは攻撃されたことに驚く。

「私のすることはあなたが決める」とじゃない

ルミーは言いながらも攻撃を続けた。（このときのルミーはまだなりたての魔道士）

「フン、俺様に攻撃したことを後悔するがいい」

アシュラもそう言いつつ反撃し始める。

その反撃した攻撃物でルミーはアシュラが神魔だといふことに気づく。

「神魔か。名前は？」

「アシュラ。アシュラ、シユーティーン」

アシュラは不満にも自分の名前を素直に言った。

アシュラもルミーがどういう素性のものか分かつたからだ。

そしてそこから果てしない闘いが続いた。

その闘いは命の取り合いだった。

両者ともども最後には瀕死状態に陥ったぐらいだ。

瀕死状態であるにもかかわらずアシュラには負けるはずがないと確信を持っていた。

一方、ルミーもアシュラは滅ぼせないと確信していた。

だからなのか、瀕死状態にもかかわらずルミーは破邪の剣を召喚した。

破邪の剣は別名、邪清の剣 とも呼ばれている。

邪を破る剣の意味はその字の意味も含め、

邪を吸収し力に変えるという意味も含まれていた。

邪を清める剣は字の意味どおりで邪を清め、神氣を強める剣でもあった。

その二つの名をもち、その剣には盟約の剣といつ剣本来の名があった。

盟約する者は剣自身が選ぶ。

そう、剣にも意思があつたのだ。

その剣にルミーは何とか力を振り絞つてアシュラを封印した。

その後ルミーはしづらべの間、昏睡状態であったが。

アシュラはその封印を何度も解こうとした。

早く出たい一心で。

何故出られないのかつとアシュラは自問自答していた。

そんなとき、アシュラの頭に直接声が聞こえたのだ。

——お前が邪悪な心を持っているのはけもの封印は受けないであつ

と。

そしてそこからアシュラと剣とで口げんかにも近い会話が長い年月の間繰り返されていった。

アシュラを剣に封印したルミーはしばらくの間剣を放置していた。

だが、ルミーはたびたび剣の刃を磨いていた。
無表情でせつせと丁寧に磨いていく。

そのとき、剣を通してルミーの感情が入り込んできたのだ。

――みんな、私が役に立つとわかるようになつてから態度を変えた・

――前は私を避けていたのに・・・
今度は何をたくらんでいるんだろう？

――私はただ存在価値を否定しないで欲しいだけなのに、
認めて欲しいだけなのに

――道具になんてされたくないのに

アシュラは入り込んできたルミーの感情に頭が混乱した。

封印される前に話した会話では

こんな風な子供じみた態度をとつてはいなかつたはずだ。

いや、こいつはまだ子供だ。

これが当たり前のだろう。

だが、人に弱みを見せず毅然とした態度をとるほどじつはどんな環境にいたのか・・

けして、人に弱みを見せない。

けして、弱音をはかない。

けして、警戒心を怠らない。

けして、信用しない、気を抜かない。

その四つがこいつをしばつてているのだろうか？

アシュラにはルミーが泣き叫んでいるようにしか思えなくなつていった。

そのときからアシュラがルミーに対する見方をかえはじめたのだ。

だが、時がたつにつれルミーの心までもが子供ではなくなつた。

多少は子供のようなときもあつたが。

そのことが氣になりだしたアシュラに剣は書つ。

――我が主、ルミーは心を病んでくる。

――お前も聞いていいだろ？・心の叫びを。

――本来、始めに聞いたような心の声が今の年齢と同じになるのだ。

――じつはなんだが、我が主はまだ子供なのに大人びすぎだ。

——主の境遇とお前の境遇は似ているな。

——お前の開き直りと主の凍結した心・・それはまるで正反対だが・・。

と。

剣自身も苦痛なのだ。

アシュラは剣の言葉とルミーの心の声に心を揺さぶられていたのだ。

まあ、悩んだ結果、ここを助けたい一心で封印を破ったわけだが。

アシュラは剣を思いでしづながら再び想つのだった。

・・どうにかして、俺にでも警戒心は解いてもらわないとな・・・

と。

第十一話 無自覚な無茶、封印の過去（後書き）

長くなりました。

第十一話 頭の回転の速さ=冷靜か?

アシュラは異空間を渡つてルミーのいた城の門へと降り立つた。

腕の中にいるルミーと門を交互に見つめてアシュラは立ちすくむ。

・・んー、どうしたものか・・・

アシュラは考える。

ここで誰かを呼ぶのはおそらく簡単だが
俺を見れば大抵の奴らが逃げるか攻撃するかのどちらかのはじに
見えている。

それにどの臣下もルミーは信用してなさそうだしな・・・

アシュラは悩んでいた。

そこへアシュラの神氣に気づいたか、すぐさま門に駆けつけてきた
人物がいた。

「あいつは・・・」

アシュラは駆けてくる人物の姿を見て思い出す。

・・剣を鞘^{さや}ごともつていった奴だな・・・

と、思い出し、相手が来るまで待つた。

「神氣に氣づいてきてみれば・・・封印されていたはずのアシュラ
が・・・なぜ・・・」

相手はアシュラの名を口にする。

その相手とはゼンだった。

ゼンはルミーに頼まれ剣を持ち出した人物であった。

「ほおお。貴様は俺様が分かるのか。
確かに封印されていたがな。

いや、それより、こいつのほうを――」

「ルミー！？何故気が半減しているつ――？
いや、それよりも治療が先決だ――！」

「――――」

アシュラはゼンの言葉に圧倒された。

俺様の言葉をさえぎりやがつて・・・

そういう怒りもあつたが何より、

ゼンの頭の回転の速さにアシュラは驚き怒りは収まった。

「アシュラ、悪いがルミーを運んでくれないか？」

ルミーがアシュラの腕の中にいるつて事はルミーはアシュラを信用したんだろ？

俺は医者を呼ぶから・・ルミーの部屋は分かるよな？」

ゼンは早口にしゃべる。

ルリーは俺様を信用したわけではないが・・・まあいい。ゼンは心の中で戸惑い、だがそれも一瞬のこと、すぐに

「ああ」

と、アシュラはゼンの言葉に頷いた。

「じゃあ、頼む。」

ゼンはやつぱり呟き去っていった。

アシュラはすぐに浮上しルリーの寝室へと移動した。

ヒュッ

魔族の力があればすぐに光と回じ速さで行くことは可能、すぐに着いた。

アシュラは魔力で寝室の扉を開ける。

寝室の中は大きなベッドとクローゼットが一つずつあるだけのシンプルな部屋だった。

アシュラはルリーをベッドに横たわらせた。

そして寝苦しくないようマントを取り外す。

アシュラはルミーの荷物をベットの傍に置いた。

「・・・・」

アシュラはゼンと医者が来るまでの間ルミーを見つめていた。

寝顔は無防備で可愛らしいが顔色が悪い。

傷が進行してきているのが分かる。

ガタン！！

扉の開ける大きな音がした。

アシュラは振り向く。

医者はアシュラを見て田を見開いた。

そんな医者を見てゼンは

「ハル、アシュラのこととは後だ！ルミーを早く！」

と、叫ぶ。

「は、はい！」

医者・・ハルと呼ばれた者はすぐさまルミーの元へ駆け寄った。

アシュラは一步身を引いた。

ハルはルミーの診察をし始めた。

「ハルは女の医術師だ。

ハルなら問題はないはずだ。

男の医術師も惨敗だからな。だが・・・

ゼンはそう誇らしげに言つが、最後は自信なさげなくべらついた声を
だした。

「・・・」

アシュラはそれに対しても言つた。「…

それを察しアシュラは何も言わなかつた。

「ルミー様は吸血鬼に噛まれましたね、上級の。
これは非常に危ないつ。

すぐに治療いたしますが、噛まれた箇所は二箇所あります。
ルミー様自身治療は可能なはずですが・・。
いや、それよりも後々熱が出ると思います。

私の力をもつても最小限に食い止めるのが限度です。
魔法薬をおつくりしなければ・・。
とりあえず治療をします」

ハルは早口で要約して述べる。

すると、アシュラやゼンの言葉を待たずして呪文を唱え始めた。

それに圧倒されてアシュラとゼンはただ黙つて見守るしかできなか

つた。

ハルの手がルミーの首筋にかざされる。

すると淡い白い光が溢れ始める。

しばらくその状態が続いた。

そしてしばらくするとハルの呼吸が荒くなつた。

ゼンが

「大丈夫か？」

と、ハルに聞く。

「は・・・はい。

・・もう少し頑張りますので・・・」

ハルは肩で呼吸をしながら言つ。

アシュラは眉をひそめた。

ここは力で支配された国だ。信頼されて築いた王と民ではないはずだ。

なのに・・どうして治療することを諦めない？

嫌々従つてゐる者が重症だつたらいいよつて手を抜いて次期王を待つべきのに・・。

アシコラは思つ。

この者はルミーを少なからず敬つてゐるのだろうか？

ルミーはけして人を頼らうとはしないのに。

心を開こうとはしないのに。

と。

ハルはその後腕の傷も治療した。

だが、どちらも完治まではいかない。

その証拠にルミーの顔色はますます悪くなり呼吸は浅くなりつつある。

「つ・・・。

ルミーさま・・・は、熱で・・意識がありません。

薬を渡すので・・水に溶かして・・飲ませてください。
氷とタオ・・ルを・・用意・・して・・く・・ださい。」

ハルは途切れ途切れに言い、薬をゼンに渡した。

「ああ、わかつた。ありがと、ハル。」

ゼンはそれを受け取りハルに手をかざした。

するとハルは魔力で一瞬包み込まれた。

「あ・・ありがとうございます、ゼン様。

おかげで回復いたしました。

あ、ルミー様の傷・・吸血鬼の牙のことですが私も詳しくは知りません。

ただ、私のような医術師ではどうにもならないことが・・。

ハルは最後、戸惑うような声で言つた。

「・・。それは？」

ゼンは眉をひそめて聞く。

アシュラも眉をひそめて聞き入る。

第十一話 頭の回転の速さ=冷靜さ？（後書き）

途中になりました。

すみません。

あ、誤字脱字あつたら報告ください。

あと、感想、評価お待ちしております！――

第十二話 後遺症

「それは・・上級の吸血鬼だけが持つ 牙の性質 なんです。」

ハルは戸惑いながらもはつきりと口にした。

「「！」」

アシュラもゼンもその言葉に驚愕する。

「下級の吸血鬼に 噛まれただけ なら多少の貧血でおさまります
が、

上級の吸血鬼に噛まれたとなると・・それだけではおさまりません。
それに・・、上級の吸血鬼には噛む際に 毒素 を相手に注ぎ込む
ことができるんです。」

ハルは続けて述べる。

「・・毒素？」

ゼンが眉をひそめて聞く。

「はい、 そうです。

その毒素は私のような医術師では到底消し去る「ことはできません。

毒素は 人の心を蝕む存在 ですから・・。

そしてその毒素を注ぎ込まれた者は・・吸血鬼に場所を知られます。

「

ハルは悔しそうに言いつ。

「吸血鬼に・・・場所を知られる・・とこいつのはじめどこのことだ？」

アシュラはハルに問いつ。

「え・・・。

えと・・ですね。・・吸血鬼は不死ですから体は滅ぼされても、精神体で地上に残るんです。

ですから・・もし、ルニー様に牙を刺した吸血鬼がルニー様を望んでいるとしたら・・

場所を知ることができ心に入り込むことができるんです。

毒素は・・相手を知ることと、相手と疎通ができる」と・・の二つの役割を持っているんです。

ですから、毒素は医術師には消し去ることができません。

僧侶の方々ですら消し去ることはできないかもしれません・・・

ハルはアシュラからの問いに驚き、間違えないよう言葉をつむぎだす。

「そうか・・」

アシュラはそれを聞いて呟く。

「ハル、他に害はあるのか？」

ゼンがハルに問う。

「あ、もしものことですが・・・、一つあるんです。
ほんともしもなのですが・・・」

ハルは言つていいものかと迷いながらに言つ。

「それは？」

ゼンは問う。

「吸血鬼の毒素は別名、牙の呪い・・・とも呼ばれていて・
もしかしたら、あとあと、
ルミー様が強力な魔法を使つたりして多大な魔力を消費したりでも
すると・・・
体に一時的な害を与えるかもしれません。
俗に言う後遺症・・・って言う奴の類なのですが・・・。」

ハルはゆつくりといつ。

「後遺症・・・」

ゼンが呟く。

「そう・・・後遺症です。

吸血鬼は血だけではなく魔力も好みますから。
毒素を通して味わっているのかもしれません。

先ほどはもしもといいましたがルミー様の場合一箇所牙が刺されま
したから・・・

で、ですが、安静にしていれば、急に多大に魔力を消費しなければ

大丈夫ですから……」

ハルは力強く最後は言い切った。

「ああ、くれぐれもルミーには安静にしてもうから…。
ハル、ありがとう。君はよくやつてくれた。あとは俺が何とかする
から」

ゼンはハルに微笑んだ。

「もつたいたいお言葉ありがとうござります。
何かあつたらお呼びくださいませ」

ハルはそう言って退室していった。

「・・・・

「・・・・

二人に沈黙が訪れる。

後遺症…後々それが出てくるならばルミーには大きな痛手だな…

アシュラはそう思いながらルミーを見つめた。

「アシュラ…しばらくルミーを見ててくれないか?
俺は氷とタオルを持つてくるから」

アシュラにゼンは頬むよつな口調で言つ。

言われなくても分かつてゐる。

そういう意味も含めてアシュラは頷いた。

ガタン

ゼンは頷いたアシュラを見て、すぐに退室していった。

アシュラは顔色が悪いルミーに近寄つた。

近づくにつれて呼吸が聞こえてきた。

アシュラはルミーを覗き込むようにして見つめた。

・・・。

額を覆いかぶさるバンダナがある。

アシュラはそれをとつたそのとき、

ビクッ

と、ルミーの体が震えた。そして顔も一瞬引きつった気がした。

「…？」

アシュラは一瞬手を放した。

ぱさつ・・・

バンダナが床に落ちる。

だが、震えたのは一瞬だけだった。

そして何事もなかつたかのように表情を戻した。

その一連をみて思わずアシュラはルニーの額に手を伸ばした。

第十二話 後遺症（後書き）

今回は短くなってしまった。すいません・・

第十四話 異常な目覚め

アシュラの手の指先がルミーの額に触れるか触れないかのところでも
ルミーはぱりと皿を開けた！！

「…？」

アシュラは思わず手を引っこめる。

ルミーはガバッと上半身を起こした。

「…ハア…ハア…ハア」

上半身を起こしたルミーは息を乱していた。

顔は青ざめて汗もじつと噴き出していた。

「…」

アシュラは突然のことドン貢葉を失った。

「…」

ルミーは顔を歪め、手で皿をおさえ込む。

おやいくぬまいがしたんだわ！」

アシュラはルミーの背中を支える。

「無理は——」

「…………は……?」

アシコウの顔を睨み、オーラリーが聞く。

「…………のせり——つ——！」

俺様がせっかくせっかく心配しておいたのに——なんだその態度はッ！――

アシコウはうつむいたいのをぐつとこらえ

「オ、オマエの部屋だつづ～

と、叫び。

だが、声は怒りで震えていた。

「ほ、ほんとにつれてきたんだ……」

ルミーは心底信用なわけに言つた。

ルミーがいつもどおりならそれに対してもか言つておらずが、今回はスルーだった。

「……。」

今の言葉でアシコウの怒りは落ち込みに変わった。

・・まだ信用してはくれないのか・・・（しゅん・・とする）

「アシュラはそういう風になるのをこらえた。

「・・・」

「・・・」

何故か一人には氣まずい雰囲気が・・。

アシュラはじーっとルミーを見つめる。

だが、ルミーはボオーッとしていて氣づかない。

頬が赤い。

おそらく熱が出始めたのだな。

ルミーの瞳も虚ろでしつかり見えているのか多少気になつた。

「ねえ・・・

「おまえ・・・」

二人の声が同時に響く。

「・・・」

「・・・？」

そして二人同時に驚く。

「なつ、・・なんだ？」

アシュラは動搖を抑えながら聞く。・・抑えられてはいなかつたが。

「そつち・・じせ・・なに?」

ルミーも負けじと言い返す。だが、表情は辛そうだ。

「オマエに・・何か言いたいんじゃないのか?」

アシュラはききかえす。

こうなるとお互い意地の張り合いだ。

アシュラはプライドが高いから自分から折れない。

ルミーも人に譲りだすと最後まで引かない。

こうなるとこうに話が進まないのは目に見えている。

「そつちからいいなよ・・

「オマエからだ、早く言え」

と壇つよつなレベルの低い攻防が・・。

それが何度も続くとルミーのほうに限界が訪れた。

「一ノ二三」

ルニーの顔は見る見る真っ青になり、体がふらついた。

「オイッ！」

慌ててアシコラは窓をしのぶ。

アシュラの手がルミーの体に触れた――。

なつ
・
・
！
？
・
・
あつ
熱
い
つ
・
・
！
！

アシュラは目を見開いた。

ハ・ア・ハ・ア・つ

ルリーは息を乱し、何かを口に呟く。「元気を出さないで」と身を固める。

「？」
——エマオ

アシヒカラは誰いかでなくして詫葉を飲み込んだ。

ボヤー

と、ルニーの首筋から、腕から奇妙な光が溢れ出したのだ！――

すなと、

「——！」？

と、うめき、ルニーは耳を何故かふさいだ。

「……？」

アシュラはわけが分からぬまま、ただルニーを見つめることしかできなかつた。

第十五話 吸血鬼の魂

『オオー、コヤツノチハスバラシイ～ソソラレルウ～』

ルミーの頭に、そして耳にその声が響いた。

自分を傷つけた吸血鬼ではない吸血鬼の声がした。

やつ・・・やめて・・いや・・ききたくない・・

『コヤツノナカニハ“ワガアルジ
タマシイノカケラ我が主ノ魂の欠片”ガネムツテイル』

・・いやだつ・・・ききたくない・・

『モウイナイワガアルジ・・ワレラノタメニクレタ“シフクノアジ
至福の味”・・

』

『・・ゾンブンニアジワオウ・・・オオ～、ナガレテクルコレハナ
ンダ?サケビカ?』

・・いやあ・・ヤメテ・・ききたくない・・・ヨロコバセタクナイ・
・誰かあ・・タスケテ・・

『モットキキタイ・・ソウダ、モット、ダ。ココロカラフルエロ、
ソウダ。

チヲ、ソシテ、ワレラニマリヨクヲ、ヒトトキノカイラクヲ・・

ルミーは耳だけでなく目もふさいだ。

「……いや……あげない……せかない……せり……やめて……つ
——」

心の叫びが思わず口から漏れる。

口から漏れ始めると後はもう早かつた。

『ソウダ、ソウダ、ロワカレ、ロワガレ。ソーキョウフゴン、ワガ
ノゾミ・・・

チラオーチラクレヒーーー、オイシイオイシイオマヌトヲオオ』

・・モウイヤツ、キキタクナイツ・・ロワイツ・・・いやあああ
ああああーーー

「イヤツ・・ロワイイイ・・ヤメテツ・・やめてええ、いやああ
あつつ」

「あげない・・わたしたくない・・ロワイイツ・・ツヤ、いやあ
あああ」

ルミーの心は崩壊寸前だった。

「おっ、おこつーーだつたつーー?」

アシコラが突然叫びだしたルミーに声をかけ、体をゆする。

「……いやつ・・やめてえつつーーいやああああーーー

ルミーにはアシコラの声は届かない。

『ソウダ、サケビヲオオ、コヨヲオオ、キカセロオオ～
・・チヲオオーマリヨクラオオーーフレラ、ウ”アンパイア、ニ
イイー』

・・いやひ、やめてひ、こやあああつあああー！・・だれがあんた
たちにつーーつ

「いやあああつ！吸血鬼っなんかに・・あげたくないつ・・わたし
たくないつ・・」

「おいつーしつかりしわつ！・・俺様の声聞こえてるかッ！・・俺様の
声を聞けッ！・・」

ルミーは叫ぶ。

アシコラも叫ぶ。

ルミーにはアシコラの声を聞いている余裕がない。

「へんつー・

アシコラは舌葉を吐き捨てるよつて言つて、ルミーを抱き
しめた。

「やつ・・やめてつ・・・いやああつああ・・あ・・・・・・・・

ルミーはなおも叫び続けるが途中で声がやみ始めた。

『・・ナツ・・ナナツ。ダレダツ、コイツハツ・・・フレラノジャマ
ヲスルナツ

・・・・クソツ・・・コレデハムリダツ・・・チツ、マタクルカ・・・
・『

その声を最後にルミーには吸血鬼の声が聞こえなくなつた。

・・キエタ・・?聞こえなくなつた・・?・・もう平氣??

吸血鬼の声が聞こえなくなつた後ルミーは徐々に落ち着きを取り戻していった。

「・・・!?

ルミーは落ち着きを取り戻しよつやく今の状況を把握することができた。

「・・おいつ、大丈夫か?」

突然聞かれたその声にルミーはビクッと震えた。

肩、背中、顔・・・そのどれもに何らかの感触がした。

顔は相手の胸元でうずめられ、肩には相手の顔が、そして背中には相手の手がある。

「おいつ、聞こえるだろ?俺様を無視すんなつ

声からしても抱きしめる強さにしてもアシコラだつてことが分かつた。

「・・・だいじょうぶ・・・」

私は言った。

「ほんとか・・？」

アシュラは私を放して額に手を当てた。

私は額に触れられた途端ビクッと震えた。

「・・・・」

アシュラは少し顔をゆがめた。

「・・・？」

私はそのことに首をかしげると

「熱・・」

と、アシュラは呟いた。

「え・・」

私はアシュラを見上げた。

「熱・・さつきより上がってるぞ。
何がだいじょうぶだあ？」

「ぜんぜん大丈夫じゃねえよ。

お前ら人間はもろいくせに強がりだな。」

アシュラはそつと私の言葉を待たずにベットの上に私を寝かせた。

「なつ・・・」

抵抗する間もなかつた。

「・・・」

「・・・」

アシュラは私を上から見下ろす。

私はアシュラを下から見上げる。

だが、目の焦点が合わずさつきから視界は歪むばかりだった。

「つ――」

「お――」

私が顔を歪ませ、それにアシュラが何か言おつとすると

ガチャッ

と、扉が開く音がした。

「アシュラ、ルミーの調子は・・・つて、ルミー意識を取り戻した
んだな」

そう言つて部屋に入つてきて私を見下ろしたのは紛れもなくゼンだつた。

「ゼ・・・ン・・・・?」

私は歪んでいる視界の中に何か新しいものがよぎり、声で判断して聞いた。

「あ、ああ。ゼンだ。・・・・・。

あの時は驚いた・・。

まさか、アシュラが・・お前を運んでくるとは、な。」

ゼンは何故か戸惑いながら言つた。

・・ゼン?

「あれは・・・。

アシュラが・・ふう・・いん・・・を・・破つて・・かつて・・に・・

・!?

私が言い訳を並べ立てようとするけどゼンがこきなり私の頭を持ち上げた。

「つ――!?

視界が一変し空間が歪むように視界も歪んだ。
目を開けているはずなのに何も見えなくなる。

だが、それも一瞬のことですぐに戻されたが頭のすぐ下に冷たい物があつた。

・・ひんやり・・・する・・氷枕??

「ルミー、大丈夫か?・・悪いな、いきなりで。

あまりにも熱っぽい表情してるので・・つい体が勝手にな。」

ゼンが詫びるよつに言つた。

だが、私には声だけでゼン自身は見えない。

「・・・」

意識も朦朧として私が何も言えなくなると、

「・・・」

さつき、こいつの首筋と腕が光りだした。

そのとき、こいつ・・取り乱したんだ。

・・今はおさまっているが・・。

少し休ませたほうがいい・・。

と、アシュラは言つた。

・・・アシュラ・・?

どうしてアシュラがそんなことを言つて居るのか私には分からなかつた。

そして今、どんな表情で言つて居るのかも・・。

「・・・ああ、そうだな。

・・ルミー、また来るから、今は休んでるよ~。」

ゼンはアシュラの言葉に頷き、私に言った。

・・一人とも・・・私を心配してくれてるんだ・・・。

「クン

私は頷いた。

「じゃあ、またくるからな」

そうこうしてゼンはまた部屋を出て行った。

「・・・・」

「・・・・」

また、部屋の中はアシュラと私だけになってしまった。

「お前・・俺様が見えてるか?」

アシュラは私に静かに聞いた。

第十五話 吸血鬼の魂（後書き）

ちょっと気晴らしにて書きました。
すいぶん長いこと書いていなくすみませんでした。

第十六話 神魔の復讐（前書き）

最初はルミー視点ですが、途中からはアシュラ視点で書かれています。

第十六話 神魔の復讐

「・・み・・え・て・・ない・・」

私はそう答えた。

実際、田の前は真っ暗。

すぐ傍にアシュラがいるんだろうけど、私にはその影すら分からなかつた。

それを分からせるのは、神魔の氣と声だけだ。

「・・。なり、寝てうしつ・・・」

アシュラは言った。

アシュラは城の外にある同じ神魔の氣配に気づいた。

「わかつ・・た。・・ね、・・る・・ね、・・あ・・りが、と・・
う

ルミーはアシュラに囁く。

「あ、ああ・・もう、しゃべるな・・田を開じろ」

アシュラは言った。

だが、城の外にある者の気配に動搖し、言葉が突っかかる。

ルミーは言われたとおりあつさつと田を開じる。

そして、すぐに眠りに着いた。

アシュラはすぐに、城の外へ向かつた。

ヒュンツ・・シコツ・シャツ

瞬間移動ですぐに城の外へ出る。

城には結界が防御の結界が幾重にも重ねられているが、
城の主であるルミーが負傷の今、結界は弱く、気休め程度のもので
しかなかつた。

だから、神魔であるアシュラはすぐ突破することができた。

城にすんなり入れたときも今と同じ原理だ。

アシュラは城の真上を見上げた。

そこには、・・・アシュラと同じ神魔の氣を放つ者がいたのだ！

アシュラはそこへすぐに向かい、

「誰だッ？」

と、聞いた。

「ようやくあらわれたな」

その者は名を名乗らなかつた。

続けざまに

「もし、お前がここへ来るのが少しでも遅かつたのなら
ここを破壊してくるところだつた」

と、不敵に笑う。

「確かに。ここは今は無害だからな。
それよりも、何故俺を呼ぶ？」

アシュラは聞いた。

「僕の名は**蜘蛛陰**。

下級魔族、神族、蜘蛛族、の血を生まれ引き継いだ混血の神魔だ」

その者は名乗つた。

蜘蛛陰は髪がエメラルド色で目が紺で、姿は人型だが、足や腕に奇妙な線が刻まれている。

背中には大きな繭が背負われていた。

・蜘蛛族？・・・そういえば、そんな種族もいたな。

アシュラはあーそういうふうに思って思い出す。

蜘蛛族は、糸を自在に操り、念力といった能力を授かる種族だ。

「ほおう、で、その蜘蛛さんとやらが何故俺を？」

アシュラは聞く。

「僕等神魔は種族の違うものの同士が成して生まれる存在、それゆえ、蔑まれて生きてきた。
見返したいと思わないか？」

そのためにこの世界のどこかに孤立して生きている神魔を集めているのだ。」

蜘蛛は言った。

「見返すため・・か。

そのために集め、どうするつもりだ？」

アシュラは問う。

「神魔はどの種族よりも優れている。
多勢で決起を起こせば、種族の頂点に君臨するだらう、
さすれば、あとは思いのままだ。

だが・・僕等の数じや他の種族に長期戦を持ち込まれれば負けは確実。

そのために、今は数と力が必要だ。」

蜘蛛は言った。

「数はさがすとして、力のほうは？」

アシュラは聞いた。

「僕等は人を食らいその力を得ることができる。

人間は多いが弱い部類だ。

それでも食らう奴を選べば大きな力は得られるだろう。」

「・・・・

・・人を食らう、だとお！？

アシュラは驚いた。

確かに自分を蔑んできた奴等には見返したいが、そのためには人を食らうなどと・・。

アシュラには迷いが生じていた。

それはルミーと共にいたためだった。

「だが、人間には稀に僕等にも取り込めぬ者がいる。
その者は食らうことなどできないだろう」

蜘蛛は言った。

・・ルミー・・のことか。

「それはあとで考えればいい。

今は僕等だけの種族の国と数が優先だ。

・・お前はどいつもかる?
僕等と復讐しないか?」

蜘蛛はきこてきた。

「・・・ああ」

アシコウはとりあえず、頷いた。

ルミーのことがあって少し戸惑いもしたが、復讐に比べれば、な。
それに・・まだ殺されなくてすむから、な。

「俺の名はアシコウだ」

アシコウは乗った。

「お前なら頷くと思つていた。

これからは“仲間”だ。

よろしくな。」

蜘蛛はきこえて、手を差し出した。

仲間・・その言葉にアシコウは少しうれしくなって

と、言こ返し、口の手を差し出し握手を交わした。

だから次は仲間探しだ。

「拠点はもうある。

だから次は仲間探しだ。

手伝ってくれるか？」

「ああ」

蜘蛛の言葉にアシュラは頷いた。

「僕は北を探す。

見つけたら気配で合図だ。

あと、いい人間見つけたら食えよ、力を蓄えなければ力は出ないからな。」

「・・ああ。

俺は南を探す。」

アシュラは蜘蛛の言葉に頷きながらそう言った。

ソシテ一人はそれぞれにちらばり同じ同族を探しに行つたのだった。仲間

第十六話 神魔の復讐（後書き）

あつ、お気に入り小説登録数が増えてる！？

このお話を読んでくれている皆様には感謝し切れません。
本当にありがとうございます。

本当にうれしいですッ。

思いつきで書いたこの話、書いててスランプにも陥ることがあります。
したが

皆様が読んでくれたという事実のおかげで励まされ立ち直ることができました。

これからもどうぞよろしくお願いします！！

第十七話 南の雲雀（前書き）

ここからはアシュラが冒険します。
ちょつとルミーちゃんはおやすみですっ

「主人公だけごべつにいいや」

「ハンツ俺様が主人公だー、はつはつはつ

これが二人の温度差です。

第十七話 南の雲雀

アシュラは南のほうを飛んでいった。

長い間飛んでいるがいまだに同族の気配はしない。

・・疲れたな・・

そう思つてアシュラは近くの林に降り立つた。

「！・・・」

「！・・・？」

アシュラハ目を大きく見開いた。

近くに人間がいたのだ。

そいつはアシュラに気づき、腰が抜けたのかストンとしりもちをつく。

「・・・・・」

・・・じいつの魔力・・欲しいな・・

不意にそう思つ。

これは魔族の欲求なのだろう。

ルニーの傍にいてもこれほど感じたことのない欲求が全身を駆け巡る。

まあ、もつとも、封印される前はその欲求に身を任せていたのだが・。

「フ――――――」

そいつはまだ幼い子供だった。

だが、秘められた魔力はとてもそそられた。

・・食べてしまえばらくなのだが・・

そいつ思つてそいつを見る。

するとそいつは田を潤ませ後ずさりをする。

「~~~~~」

そんな顔されるとやううにもやれないでいる。

人を食うには二つの方法があった。

己の魔力で生み出した攻撃で相手を倒し、
氣体に散らばった魔力を食らえればいい方法

相手の体を引き裂き、血を食う方法。

一つはまるで吸血鬼だが、ようは魔力があれば何でもいいのだ。

アシューラはその後そいつとにらみ合いが続き、アシューラは欲求に負けてそいつを食らった。

「・・ウマイ」

口元をぬぐつて呟いた。

この味を覚えると止められない。

それは分かりきつたことだつた。

その後も近くの村でアシューラは人を食らい続けた。

アシューラは人を食らうことで快感を覚え理性もなくなる寸前であつた。

だが、その理性を取り戻させたのは・・

目の前にいる少女だつたりする。

「・・・・」

「こやあ・・こないでえーー！」

少女は叫ぶ。

アシュラは近づき、はつとした。

・・ルミー・・・

そり、アシュラはそこにいる少女とルミーが重なって見えたのだ。

アシュラは理性を取り戻し、辺りを見回した。

あたりは悲惨なことになっている。

村の家々は壊れ、あたりは血生臭く人の気配はもはやない。

この村も残りはこの少女のみになってしまったのだ。

少女の目から涙が溢れ、いやだいやだと死にたくないと嘆いている。

そんな弱い少女がなぜかアシュラにはルミーと重なって見えてしまったのだ。

ルミーは感情に乏しく、冷たく、

涙を流すところなんて剣のときに数えるほど見た程度である。

そんなルミーと、この・・・泣き叫び死に怯える少女と、重なったのだ。

少女からは靈力と魔力の混沌の力を感じる。

食らえないわけではない。

食いつのつと悪えさせ食べられるのである。

アシュラの心には「悪魔」と『天使』がいた。

「ほりほり、おこしげだらうへ・へつかまえよつ」

悪魔がそそのかす。

「だめだつ、ルミーに会わす顔がねえだらうへ・

天使が言ひ。

「いいじやんか、もとは敵同士だ
そんなことよりこいつはめつたにいないレアモノだぜ?
そういうのははやいもんがちなんだよつ」

悪魔がいろいろ並べ立てる。

「いくら前は敵同士だつたからつて今は違うだつ?
剣になつて反省したんじやないのかよつ—!—」

天使が頑張つて訴える。

悪魔と天使がアシュラの心を揺さぶる。

・俺は・・・・・俺は・・・

だが、アシュラは結局悪魔のせいで乗ってしまった。

アシュラが少女に近づいていった。

「ひいい　いいい　」

少女は後ずさりをする。

そつそのときだった、

アシュラの前に何かが現れ少女の肩にトンシと手を置いたのは、

アシュラはじめて立ちはだかる。

・・止めてくれた・・

アシュラは救われたと思つ。

アシュラは歎んでいる今、

本当に本心から少女を欲しいなんて思つていなかつたのだから。

悪魔にやかれただけであつて。

「僕の獲物に手を出さないでよネ？」

僕のお仲間君

その者は俺に言った。

「・・・・」

俺は一目見てこいつが仲間だと分かった。

そして理性も完全に取り戻した。

「・・・

悪かった。一度味を覚えるとヤミツキになってしまひからな。
助かった、礼を言つ。」

俺は言つた。

「ヒックヒック～～、ひつ雲雀・・

少女はそいつを見上げしゃくくりを上げながらそいつの名を呼んだ。
・と思づ。

「ふんつ、分かればいい。

これは僕のだつて事が分かればネ」

そいつは言つた。

「君・・僕を探してたみたいだけど
・・途中で食事なんかしちゃって道草くつてたけど
僕に何の用？」

あ、僕は雲雀。魔族、朱雀族、神族、の血を引き継いだ神魔だ。」

そいつは俺に嫌味っぽく言つた。

・・まあ、そうだがな・・

心のうちにそう思つた。

雲雀は黒髪で少しクセツモ、瞳の色も黒で、田元には十字架の黒い刺青がある。

ただ・・背中には翼が生えており、天使かと思つまどの両翼だが着こなしているのは黒いスース、手にはどの指もリングがはまつていて、

鎖がくくつづけてある。

そしてきれいな顔立ちに浮かぶ笑みは悪魔の笑み。

「俺はアシュラだ。魔族と神族の混血・・神魔だ。
雲雀を探してたのはだな・・復讐をしないかつて誘いに来るためだ。
まあ、もつとも俺も誘われた口だが・・。」

俺は言った。

「復讐?

俺たちを殺んだあいつらにいつ――いつひつの?」

雲雀は聞く。

「ああ、そうだ」

俺は頷く。

「ん――」

雲雀は少女のほつをチラツと見ながらなにやら考へ始める。

少女は泣き腫らした目で見上げて雲雀を見る。

「ん、イイヨ。」

なにやら考へて雲雀は頷いた。

「わづか・・ならーーー」

「ただし・・」

「！？」

俺の声を雲雀はさえぎつた。

「ただし、ここの子は誰にも食わせないから。
それが条件。

まあ、実際のところ助かったんだよネ」

雲雀は言つ。

俺は問う。

「・・何が？」

「君が全部この村の奴を食事のオカズにしちゃつてもういいから
心置きなくこの子を連れ出せると思つたからネ。
それにーー、君にもいるようだしネ、獲物がネ」

雲雀はなにやらたくさんだ笑みを浮かべて言つた。

「ひーーーー

その言葉を聞いて俺にはなぜか、ルニーのことが頭に浮かんだ。

「どうやらこのよつだネ、この子を襲つ前一度正気に戻つたみたい
だったから
おそれくと思つて検討つけてたんだけどネ

雲雀は言つた。

「・・ああ、いる。
じゃあ、交渉成立だな？」

「モチロン」

俺の言葉に雲雀は頷いた。

「あ、この子はルピナ。
靈術師と魔道士の間の子らしい。
ホラ、ルピナ、あいせつあこせつ」

雲雀は少女を促した。

「ぬひ・・ルピナ・です」

少女は俺の目を見て言つた。

わざわざのよつな法えは消えていた。

「ああ、俺はアシュラだ」

俺も改めて言った。

「で、これからどうするの？」

雲雀は聞いた。

「とりあえず一度、俺を誘った蜘蛛のもとへいく。

俺は言った。

「ああ、分かった。
なら僕もついてく。
ルピナも抱えて持つてけばいいわけだからネ」

雲雀は言った。

「ああ、それでいい、いくぞ」

「オーケイっ」

俺の言葉に雲雀は頷きそして飛び立った。

蜘蛛のいる場は北。

今と逆方向の中、一人は・・いや、三人は向かうのだった。

第十八話 再び起きた暴走（前書き）

今回はルミーはでま～す。
シンはおやすみでーす。

「あ、でるんだ、つて私、元氣？」

「アシコワ登場以来出ていない俺は・・・こつまで、やすみだ？」

作者にきかれても・・・ネタバレしたら面白くないんで・・・。
では、どうだ。

第十八話 再び起きた暴走

ルミーは起きた。

さつきからあまり寝ていない気がする・・・。

そういえば・・アシュラはどこにいったんだろう。

私は辺りを見回した。

薄暗い私の部屋には誰もいない。

・・・なんで私、アシュラを・・探しているの?

自問自答したい気分になった。

とりあえず城には気配がない。

どこかへ行つたようだ。

あ・・・だれかこっちにくる・・・

ガチャッ

ドアの開く音がした。

「なんだ、起きていたのか、ルミー。

具合はどうだ?

とりあえず薬持つてきたが・・・」

入ってきた人はゼンだった。

「大丈夫……視界も良くなつた」

私は答えて微笑んだ。

ゼンは私に近づいて私の額に手を伸ばす……。

ピタつ

ゼンの表情は真剣な表情から安堵した表情に変わつていった。

ゼン・・・

「とりあえず熱は下がつたな。
回復が早いな、意外と。
とりあえず、薬を飲め」

ゼンはそう言つて私に差し出した。

私は「くんと頷いて薬を飲んだ。

すると、そのあと、廊下のほうからぱたぱたと足音が聞こえてきた。
そして気配もそれにそつて部屋に近づいてくる。

「・・・？」

私は首をかしげる。

・・なんで・・こんなに慌てていいんだの？・・・？

「ん？どうかしたか？ルミー・・・・・？」

ゼンは私の表情を不思議に思つていいかけた・・が、すぐに気づいた。

ドタドタ――ガチャツ――

「――？」

「大臣ッ！？何事だ！？

ルミーは体調不良なのに・・無礼にもほじがあるぞ――」

ゼンは入ってきた大臣にそう怒鳴つた。

ゼンには悪いが・・ゼンの怒鳴り声のほづが迷惑である・・。

ルミルは内心そう思いながらも、

「私はかまわない。

大臣はそれを気にしていられないほど問題が起きたんでしょ。で、どんなことがあつたの？」

と、大臣に聞いた。

何か・・胸騒ぎが・・する・・なんだろう？の嫌な予感は・・。

「は、はい。

先ほどの無礼はお許しください、ゼン様。

とてもなく大きな大事件がおきたのです。

ルミル様もお体にお障りないよう聞いていただけたらと存じます。

その事件とは・・

国の中央であるこの城の真南の方角にある農村の村人がすべて消えました。

そして今、その真北にある農村の村人までもが消え去りうとしています！！

村の建物は崩壊し、人も食い荒らされ、それはもう悲惨な状態であります！」

「と聞いています！－！」

大臣は言つた。

真南と真北の村が滅ぼされた、と。

そして、その悲惨な状態を聞き、犯人は人ではないことが判定した。

「なんだって！？
ということは・・・」

ゼンは驚いた、怒りを忘れるぐらに・・。

「私を・・気配探知機である純白のクリスタルのある場所へつれて！－！」

もしかしたら・・一年前のあの事件と同じかもしない！」

私はそう言つて、ベットから起き上がり、立ち上がった。

「なつ――――――！」

まだ起き上がるなつ、もしそうだとしても、今のルミージャ無理だ

！」

ゼンはすかさず私を制する。

傍にいる大臣はその光景にあたふたする。

「一年前って・・あの事件ですかッ！？」

大臣は目を見開いて驚く。

無理もない、私がアシュラを封印した事件のことと同じだといつて
いるのだから。

「もひ、平氣だつて。

無理だつて思うんな、ゼンも来ればいいでしょ。
それにアシュラは私にしか止められない。
まだ契約はしている。

近くにいれば封縛は可能よ。
だからはやく私をーーつれ・・てつ・・て・・・？」

ぎゅゅうつー！

最後、私は戸惑った。

ゼンがいきなり抱きしめてきたからだ。

「ゼ・・ン・・？」

私は聞いた。

「ルミーっ、俺はお前を失いたくないっ！」

失いたくないんだつ！！

だから無茶はしないでくれッ！！

・・お前が・・王になるまで・・俺はお前が死んだんだと思つてた。
あの一族から追い払われ、差別されてきたお前は無力だつた。
だから――――――

「・・死ぬわけないじゃない。

混血を差別してたのは秘めている力を恐れただけのこと。
あのときも、無力じやなかつた。

それに、混血者だからこそ簡単に死ねないものよ・・。

だから大丈夫！

それに、今回アシュラだけじやないかも知れない。
それには純血であるゼンも必要だから、ね？」

私はゼンの言葉をさえぎり、ゼンの胸元を手で押した。

大臣にこんな姿見せたくない。

それが本心でもあつたが・。

「・・・・

「頭、冷えた？」

「ああ・・・」

「なら、さつそく私も準備するから、お一人は先にいっててね？」

私はそう言って、

ちゅうちゅうと・・・つて抵抗する一人を追い出し再度をした。

着替えていつもの格好をし、バンダナもつけていろいろ魔法道具も身につける。

そして破邪の剣も、腰につけた。

すべて準備が整つたら部屋を出る。

ガチャ

あけたらすぐにゼンがいた。

「さつきは・・悪かつた。
つい感情的になつて・・。」

ゼンは私から目をそらし何故か謝つてくれる。

「謝らないでよ。

それによれしかつたし。

自分の感情もある程度は大切にしないとね、
じやあ、いこい?」

私はそう言つて、マントを翻し歩き出す。

「体には・・異常ないか?」

「うん、あの薬が効いている。
平氣だよ」

私は振り向きもせず答える。

「やうか、ならいい」

ゼンは安堵したかのように言つた。

そして気配探知機であるクリスタルのある探索室に向かつた。

そしてしばらくしないうちに着いた。

「大臣、どう？

しばらく使っていなかつたけど、調子のほうは」

「はい、大丈夫です。

これなら発動するでしょう。」

私の問いに大臣は答える。

「じゃあ、はじめるね」

私は言った。

探索室は、大きな部屋の中の中央にクリスタルがあり、それを中点とした魔法陣が床に組み込まれている。

そして一つの壁に方角ごとにその情景などを映し出すことができる。

私は意識を集中するために目をつぶり、手のひらに魔力を込めてク

リスターに触れた。

そして同時にクリスタルを通して気配を探る。

「！！」

私は目を開けた。

私の手の上にゼンの手が触れたからだ。

「ルミーはあまり魔力を使わないほうがいい。
消費しそうると後が大変だからな」

ゼンはそう言つて続きを促した。

ゼン・・そんなに心配なんかしてくれて・・・

私は頷き、再び目を閉じて続きをし始めた。

そして北を探した。

「？」

私は眉をひそめる。

北にある農村から気配が感じず、
西の方角から人のなくなる気配と人を殺める気配が見つかった。

「大臣、西を映し出して」

私はそう言ってクリスタルに魔力を込める。

「はい。・・・・」これはつーーー？」

大臣は映し出し驚愕した。

私も目を開け映し出されたものを見る。

「！ーー？」

「？ーー！」

私は目を見開いた。

なんと神魔は五人いたのだ！！

アシュラ・・・・また同じ過ちを・・

私はアシュラを見て思つた。

第十九話 五人の神魔と三人の幸人（前書き）

さてさて登場人物も増えるのでみなさーん、
がんばつてください

「増えるのか・・・俺の出番は？」

シン・・君はまだオヤスマニですっ！

「・・・」

シンが絶句しました・・

そのかわりゼンもでる！出番があれだけど・・

「すくないのか！？

でも出れるのかあーへへうれしいな！！出れない奴よりは、な

ゼン・・なんか棘のある言い方・・シンかわいそう

「・・・」

シン・・立ち直れていない。ぐせつと意外に深く傷ついたよつ。

・・ではどうぞ！

第十九話 五人の神魔と三人の幸人

「すぐに、西へ向かう、ゼン、いこう！
大臣、留守番よろしく！」

私はアシュラの姿を見てすぐさま言った。

「ああ、あの瞬間移動装置をつかうぞ！」

ゼンは言った。

そして二人は急いで瞬間移動装置の場まで走り、作動させた。

ギギィイイーーーヴォオオオオン”

装置が作動し一瞬で、あのスクリーンの移る場へとついた。

シユタンッ！

そんな音を立ててその場に着地した。

少し遠いところにアシュラたちがいた。

「アシュラ！」

私は叫ぶ。

「！？」

アシュラたちは振り返った。

「・・・？」

私は振り返った者たちの中で一人の人間をみつけたーー。

一人は少女でもう一人は男の子である。

その一人の少女を抱きかかえているのは
クセッケの黒髪で赤みがかかった翼を生やす神魔だった。

・朱雀族・・の神魔・・・

私は眉をひそめ瞬時に考える。

朱雀族は南を司つた有名な一族だつたが・・・。

もう一人の男の子を抱きかかえるのは
金髪で長いストレートな髪を持ち、

目はまるで蛇のような目つきをしている神魔だつた。

・・・Jつちは・・北を司る玄武族・・

南の朱雀といい北の玄武まで・・一体どうこうこと？？

「ルミー・・・！？」

アシュラは驚いた。

まさかいきなり現れるなんて思いもしなかつただろう。

「アシュラ、君の幸人サチヒトダヨネ？」

朱雀族の神魔がアシュラにきいた。

・・サチビト？？

なにそれ・・きいたことない。

私は内心首をかしげる。

「・・・・そうかもな・・」

アシュラは小さく曖昧に言った。

・・は？

そうかももってどうこうこと？？

私はもつと意味が分からなくなる。

「マジナシア王国の王よ、なんのためにここへきた？」

エメラルド色の髪・・深い海の色をした髪の持ち主が言った。背中に纏を背負っているから、おそらく蜘蛛族の神魔だろう。

「自分の國の人間を殺されて黙つていられるよつな志はもつていいから、私は。」

私は言った。

「・・・俺は補佐へ戻ったのかよ・・・」

ゼンが小さくもらした。

「ほおう、いまだに体調は不完全なのに・・か?」

蜘蛛族の神魔が私を試すような口調で問う。

「よく・・知ってるね。

体調は完全ではなくともなんとか痛手くらいは負わせられるでしょ
う?」

私は余裕かましてけんかを売る。

「フンッそれならまるで
貴女の体調が完全なら倒すことだって可能だといつているようでしか
きこえないわねえ?」

玄武族の神魔が言つ。

強気な声が返つてきた。

「五人っていうのはさすがにきついかもね、
特に、玄武、朱雀、白虎、の三人には」

私は言った。

「あら、よくわかっているじゃない！
人間」ときで私たち神魔と互角に渡り合えるなんてことは
ありえないもの」

玄武族の神魔は機嫌のいい声を出す。

・・人間じゃないけど・・私

「あいにく私は人間ではありませんのであしからず。」

私は言った。
ちょっと皮肉を込めながらいえたかな？

「ふーん、ならまるで、

人間じゃないから互角に渡れるとおもつてるとかしら？」

玄武族はそう言って私に問う。

「さあね、どう思つがあなた方の勝手だから。
それはそうど、まだ人間食う気??」

私は聞いた。

人間の命・・これが本題だ。

どうやつたつて鬭いは逃れられないことを知つてはいるけど。

「人間がないと復讐できないからな。」

蜘蛛族の神魔が言った。

「復讐？」

神魔なら人間なんて無くとも復讐ぐらいできるんじゃない？」

私は言った。

「貴女のような強い人なら食べれないけど

他の人間は美味しいしなにより魔力はほしいから人間はひとつよくな

玄武族の神魔が言った。

「そう……。

どうしても、人間食べるのはやめないのね？」

私は聞いた。

身構えながら。

「ええ、 そうよ。

じゃあ、 私とまず、 貴女とで闘いましょう？

私、 闘いダイスキですよ。

じゃあ、 蛛陰さん、 雲雀さん、 アシュラさん、 白夜さん、
私、 あの人とやるから手出ししないでちょうどいいね？」

玄武族の神魔は私に問い合わせ、 他の神魔たちに言った。

「あれは俺のだ。 蔦蛇^{シターネ}、 俺にやらせろ」

アシュラは玄武族の神魔に言った。

アシュラ・・俺の・・になつた覚えは私にはないけど?

私は複雑な思いでアシュラを見る。

「あら?」アシュラさんの幸人なの?
意外だわ。だけど、私は闘いたいわねえ。

あ、そうだ、貴女、こういうのはいかがかしら?」

鳶蛇と呼ばれた神魔はアシュラに言い、私に向う。

「どうこうの?」

私は聞いた。

「貴女と、その隣にいる人と、私とアシュラで2対2で闘いましょ
う?」

「ゼン・・

私は呟く。

「俺はいいぜ。

アシュラはせめて止めないとな」

ゼンは言った。

「ありがと、私もいいよ」

私は呟く。

「ならきまりね、久遠、あなたはここにいてね」

薦蛇と呼ばれた神魔は、抱えていた男の子を降ろした。

「・・・」

久遠と呼ばれた男の子は虚ろな眼をして薦蛇を見ていた。

無表情で幼いけれど、どこかしらシンに似ているとおもった。

そして・・闘いは始まった。

私は剣を片手に持ち、ビュウウッと風を相手に突きつける。

そこからバトルははじまつたのだ。

ビュウウウ、シユツ

薦蛇とアシユラは軽々と避ける。

その後ろにいた神魔も避けた・・が男の子はそのままだ。

一体どうすむかと思つたら・・・

ビュウウウウウウ・・・・・・スツ

つと紙一重で男の子は風をかわした。

かわしたときも眼は虚ろなままだつた。

ゼンが・・

「炎よ！・！」

魔力のみなぎる『』で矢を放つた。

ヒュンツ・・・ブウオオオウファツアアア” ”

放された矢がいくつもの矢となり炎をまとつ。

シユンツシユンツシユンツ

たくさんの矢がアシュラたちを襲うが・・

軽々と避け始める。

私は

「魔の舞！・！」

と、叫び、剣の舞を踊り始めた。

それとともに風がなびき、魔力が宙を螺旋する。

ビュウオオオオオ” ”、キイイイン” ”

そして魔力が竜巻となつて剣の周囲を巻き込み始める。

ゼンは私の傍にいるから影響を受けない。

それが薦蛇を襲うが・・

「蛇の芽吹き！・・」

薦蛇は一つの種を手のひらに乗せ、ふうーと息を吹きかける。

すると、

ズヴォオオオオオオ

”

種からたくさん草花や枝が伸びていく。

そして竜巻を草花たちが捉えた。

ギギギイイイ

と、草の軋みがきこえる。

・・私のほうが・・一枚上・・

そう思つた矢先に

「自然の力、戒めを解き放たれ！」

と、アシュラの声が聞こえた。

すると、草花の力がぎゅうぎゅうついと強くなつた。

卷之二

竜巻は締め付けられる。

私はその隙にアシュラに剣を向けて切りにかかつた。

ダダツ

私は走る。

アシュラは力を使う最中のため反応が一瞬遅れた！

その隙に剣でなぎ払う・・が受け止められた。

ガツガイイ

剣がうなる。

やはり一度封縛したためか。

「アシュラ……何故、人を食らつた？」

私は聞いた。

アシュラは顔を歪ませながら言った。

無理しているのだと私は思つた。

私は一度離れ、距離をとつた。

「関係は無いけど、アシュラは一度封印した。
それがまた・・つてことになるといつちとしても困る。」

卷之三

私はそう言つと、アシュラは一瞬傷ついた表情を見せた。

・・・傷つくんだ。・・・そういわれるといふ。

アシュラはその一瞬だけ隙をつくった。

「惡魔の華！」

私は闇色の花びらを矢のように鋭くさせ、アシュラに向かって舞わせる。

レバニシ・シコシ・ザシコシ

アシユラはまともに食らい。

「うべ」

アシュラはうめき、ばたつと倒れる。

「なつ――!?

他の神魔たちは驚いた。

ただ、朱雀族の神魔だけは納得したような顔を浮かべる。

「アシコラ、何故、今、傷を受けたかわかつてゐ？？隙をみせたからよ。

本当に・・アシコラハ・・・・・・・・シウ！？」

ザシユツ・・・

私は言葉を続けようとしたとき背中に大きな衝撃を受けた。

おそれりへ薦蛇に斬られたんだと思つ。

「う” - - “ ” “ ”

背中に来る激痛とつき始めた首筋と腕とで、私はつめき一瞬よめぐ。

私が振り向くとゼンも傷を追つていた。

「アシコラセんばっかりにあこでてこじているからよ」

薦蛇は言った。

すねてるよひな喜んでいるよひなそんな感じの笑みで。

私は身構えよひとしたが・・

ビュウウルウウウ
”

風に吹き飛ばされ、ばたつと、アシュラの倒れた近くで倒れる。

「わたしはもつと闘いたいの、
少しさやりがいのある相手がいたんだもの、
もつとあそばせてくれない？」

薦蛇はそういうて私を蹴り上げた。

卷之二

私はみぞおちに蹴りを食らい、転がつた。

ル・ルミー・ツ

弱弱しいアシュラの声が聞こえる。

・・私の名を呼ぶ資格なんてアシュラにあるのかな?

致命傷を受けたのに私はいたつて冷静だった。

アシュラさん、幸人が愛しい？

でも、あなたはそれを裏切ったんでしょ？」

萬葉集

」

アシュラは押し黙る。

「アシコラさん、幸人は神魔にはひつようなものだろうけど、私はここでやめるわけにはいかないわ、それにとめられない―――つ―!?」

薙蛇は弱者を見下すような感じで私を見つめアシコラに言った。

その瞬間、私は起き上がり、剣で薙蛇を炎でなぎ払った。

ブヴオオオウウウワアアアアアアア

う

薦蛇は傷を負つたあと、後ろに退いた。

「ア・・・シユラ・・・は封印する・・・罪の無い人間は殺させない・・・」

私はそう言ってアシュラに剣を向け封印の呪文を唱え始めた。

契約はしたからあとは封印呪文だけである。

「なーーつ！？」

薦蛇は目を見開き攻撃を仕掛けた！

ズシャツ・・・ダンツ！

その攻撃をゼンがはじき返す。

「邪魔は・・させないーーっ！」

ゼンは叫び、薦蛇を足止めする。

「神魔アシュラ、契約の名の下、剣に身を戒めんとする。汝の力、我の片割れとなりて、力を尽くせ」

私は呪文を唱え終わりアシュラを封印した。

ヒュウカ―――ツ・・・・・

「～～～つー

アシュラは一瞬、起き上がるゝとしたがそのまま剣へと封印された。

「ーーー？」

神魔たちは驚いていた。

無理も無いだらう。

体調不良だと叫ぶ少女に易々と封印されてしまったのだから。

だが、今回はアシュラの戸惑いが無ければ負けていたはずである。

「今・・おもいついたのだけど・・きいていい？」

私は剣をおさめ神魔たちにたずねる。

「な・・なにをいまさら貴女は・・・っ！」

鳶蛇は目を見開いたまま激怒しようとする。

“混血なる我が血よ、我に力を”

私は痛みに耐えながらも混血の力を使う。

使わなければ一行に話は進まないだろうから。

「人間を主食として食らうわけじゃないよね？」

私は聞いた。

「なぜ、そのようなことを聞く？」

蜘蛛族の神魔が聞いた。

「人間を無差別に食べるほど困っているのなら
こちらとしてもまた今みたいに鬪わなければならないのだけど、
もし、そこまで困っていないのなら、少しでもかまわないなら、
交渉したいなあーと思ったの」

私はそろいついついろいろ考えながらも

「人間以外に他の魔獣とかも食べるでしょう？」

と、私は続けざまに聞いた。

「ああ、食らう。

だが、魔の獣どもは有毒なものもあるからあまり食べない。
まあ、人間よりは力になりうるが。」

蜘蛛族の神魔は言った。

「なら、交渉したい。

魔の獣の毒なら私の魔法で浄化は可能だから。
それと、もう一つ聞きたい。

人間を食らうのは復讐のためだけなの??」

「ああ、そうだ。

基本、空腹には神魔はならない。
だが、力を強くするにはどうしても何かを食らう必要がある。
復讐には数的には少なすぎる。
だから復讐のために人間を食らうのだ」

私の問いに蜘蛛族の神魔は頷いた。

「なら、私の手助けをしてくれないかな?
いわゆる交渉つてやつだけだ。」

私は問う。

「何故、交渉したがる?」

私は返された問いに

「復讐——その言葉をきいたら懐かしくなったから。
私も一族に一度しようとおもったことがあったからね。」

だからってのと、これ以上無駄な犠牲者と、戦いは増やしたくない。
それが本音かな」

と、正直に言った。

犠牲者を増やしたくないってのは国の政治をやる上での考えだ。

復讐の手伝いをしたいってのは本音だ。

「・・交渉の内容は?」

そり、聞いてきた。

「どうやら少しば聞いてくれるらしい。

「人間がほしいというなら

あなた方神魔に死刑の裁判を下された人をあげる。
そして、毒を抜いて欲しいなら毒を抜いてあげるよ。

それと、じつちのほうは・・いろいろな害獣駆除を頼みたい。
それなら力を蓄えるエサにも害獣はあてはまるでしょ。

それ以外にも・・そうねえ、もし、戦争にでもなつたら出でもらいたいな。

あーそれと、そこにいる人間の一人はこちらで預かってもいいよ。

復讐にもできるだけ手伝つてあげるよ

それが条件」

私は言った。

「それだと、いかほのメリットのほうがおおこきがするが？」

そう聞いてきた。

「さうでもないよ。

戦争であなた方神魔が前線で戦つならあつといつ間に相手の兵は消え去るし
害獣駆除の面でもあなた方は強いから私は行かなくてすむし
人を食らつてもらえば、燃やしたり埋めたりしなくてすむでしょう？」

私は淡々とじかひのメリットを述べる。

「どう？ 交渉する気になつた？」

私は聞く。

すると・・

神魔たちは話し合って始めた。

「どうする？

あちらの交渉に乗るか？」

「ルピナの預かり場所があるならうれしいね。
いいよ、僕は賛成」

「私も久遠を預かってくれるなら

それでいて復讐ができるなら賛成ね

「俺も、それでいい。

騒がれるのは面倒だからな

皆、異論は無いようだ。

「一いちらは決まった。

交渉にのむ。」

「じゃあ、決まりね。

よひしへ、えーと、名前は――

私が聞こつとしたとき、

「蜘蛛だ」

と、蜘蛛族で髪がエメラルド色をした神魔が言つて

「雲雀ダヨ、つでこちはルピナ。」

と、朱雀族で少女を抱えた神魔が言つて

「薦蛇よ、つでこの子は久遠」

と、玄武族の神魔が黒髪で瞳が藍色の男の子の名も言つて

「白夜だ」

と、白虎族の神魔が言つた。

「蜘蛛に雲雀にルピナに薦蛇に久遠に白夜、よろしくね
私はルミー、こつちはゼンだから、あらためてよろしく」

私はゼンに駆け寄つてゼンを支えながら言つた。

ゼンは・・

「まつたく、すげい思いつきをするぜ、
そんなにシンの国に対抗したいかよ・・。
まあ、いいけどな・・。

神魔さんたち、よろしくな。」

と、ぶつぶつ呟きながら言つた。

「じゃあ、とりえず、城に帰つていろいろ話そつか。
蜘蛛たちも城へ入れるようにもしたいからね。
蜘蛛たちもそれでいい?」

私が聞くとみんなは頷いた。

「じゃあ、アシュラの力も借りて瞬間移動するから
少し補助お願ひね」

私はそつと剣を抜いた。

「アシュラは・・封印をやぶれるのか?」

白夜は私に聞いてきた。

「うん、破れるよ。

今は無理だろうけどね。

以前やぶられたから」

私はそうひ言つて、そのあとみんなを手招きした。

「アシュラ、聞こえる?
とこうことで話がまとまつたんで、とつあえず、力を貸してもいいわ
から」

私は剣の中にあるアシュラに言つて剣へと集中した。

そして・・ヒューネーシュタնッ

と、城に着いたのだった。

「あ、大臣」

私は咳く。

さて・・事情説明が大変だな・・・

「ル、ルミー様!! それにゼン様も!!
あ””後ろにいる方たちは・・・! ?」

大臣は目を見開き驚いている。

「静かに聞いてよ、大臣。

この神魔たちは私の交渉に乗ってくれたから。

とりあえず、人型だから助つ人つてことで城の者に伝えてくれる?
城の出入りを自由にして欲しいから門番にも報告して欲しい
そういうことで、いい?」

「はっはいっ。

わ、分かりました。

スグニ・・伝達シテ、マイリマス」

そのあと、大臣は足や手が拳動不審になつていたがなんとか走つて
いった。

「といひことで、とりあえず神魔だといひことは隠しておいてほし
い」

「わかった・・

私の言葉に蛛陰たちはうなづいた。

こうして私と神魔たちの交渉は成立したのであつた。

第十九話 五人の神魔と三人の幸人（後書き）

長くなりました。

少しかけなくなつていた分頑張りました。
これからも頑張つて生きたいと思います。

なんかファンタジーつて感じですね。

バトルがはいつちゃつたし・・これで恋愛大丈夫かな・・

作者も心配なきょうこのごと。

第一十話 無茶と行動

私は神魔たちを城に入れ、客を招きいれる一室に招き入れた。

「・・とりあえず、ここで話をまとめようか」

私は皆を見回して言った。

神魔は軽く頷いた。

「まず、契約条件からね」

私は、そう言つてアシュラの封印された剣を手に持つ。

「貴方たちは、人と獸の力が欲しい。

でも、私たちは罪の無い人を殺したくない。

そのため、死刑罪を下された人間と人間を害する獸を与える。

これでいい？」

私は聞いた。

「ああ」

蜘蛛たちは頷いた。

「これでいいね。

じゃあ、もう一つ、

これは私としての私情だけど、

貴方たちの復讐に手を貸す代わりに

私の敵国との戦争に出て欲しいの」

私は言った。

「いつ、シンたちの国とやれてもいいよ」
準備だけはしなければならない。

それに・・

シンがたとえ私を受け入れてもその国の貴族は認めないだろうから。

「あの国と戦争する気かー!?」

ゼンが声を張り上げる。

あの国・・とこののはシンのこぬ国だらけ。

「今はともかく、あとあとそなうなる気がするの。
私としてもあそこへと嫁ぎたいわけじゃないし、ね」

私はゼンに言った。

脅されてと嫁ぐなんてしまつぴらだもの。

「で、蜘蛛たちは？」

「・・・」

蜘蛛たちは互いに顔をあわせ・・・

「復讐に手を貸してくれるなら

戦争にも手をかねう。

それに敵国の戦争相手は自由にしていいのだろう?」

蜘蛛たちは企みの笑みを浮かべていった。

「あくまで戦争の兵とか魔道士とかだけじゃね。
それなら許すよ。

あと、城の出入りも自由だからいつでも
仲間を探しにいってもいいし、
連絡なら、契約の証にする クリスタル を
使いばいいから、ね。

今からでも契約する?」

私は苦笑して言つて契約を勧めた。

今、私は負傷しているし
あまりそういうた契約はあとで大変なんだけど、ね。

心の中でも苦笑していると

不意に背後に殺氣が沸いた。

ヒュッ

私は瞬時にしゃがむ。

スッと何かのからぶる音がした。

私への攻撃が失敗したのだ。

「・・・・・」

そのあの追撃は来ない。

私は警戒しながら立ち上がり後ろに振り返った。

「なつ・・・」

ゼンは畠を見開いて

自分がからぶつたことへの後悔を抱く。

「ゼン、殺氣が駄々漏れしてた。

それじゃあ、今の私も気づくから。

それと、私の邪魔はしないで」

私はそう冷たく言い放った。

ゼンが私に攻撃・・といつた時点で
驚くべきことかもしけないが私はゼンのことを知っている。

私を心配してくれることも。

今回もおそらく私のためにしようとしてくれたことも。
無茶されるのを黙つてみていられないことも。

そんなことを知つていて

この仕打ちはひどいのだと思つかもしかないけど
今、気を失うつもりは一ミリも無い。

「ツー。

・・悪かった。

だが、契約の前に傷は治してくれ。」

ゼンは私に願つた。

ゼンは耐えられないのだといつている。

私は背中に重症を負つている。

それなのに契約するなんて無茶にもほどがあると。

「ダメ、契約は先のほうがいい。

時間が無いから。

傷は持ち堪えられるから。

心配してくれるのは分かるけど

全部終わればしっかり治療するから」

私は言った。

怪我を負わせた張本人の鳶蛇が・・

「背中の傷は、この私がつけたものよ！

人によるけど毒だつて出る可能性があるわ！

はやく治しなさいな！――

と、訴える。

「毒ぐらい、吸血鬼の牙よりは大丈夫だつて。

そういうなら早く契約を終わらせよう。

あなた方だつて早くして欲しいでしょ。

だからそつちが先。

私は大丈夫だから。

まずはアシュラの封印を弱めるね

私はそう言つてアシコラの封印を弱めた。

自ら封印を解く事はできない。

剣はアシコラを欲しているから。

私の力と剣とでは今の私では勝ち目が無い。

剣の意に反する」とは主である今の私にはできないのだ。

シユーリ

私が封印を弱めるとすぐさまアシコラは封印を破つた。

「オイツ、貴様ツ！！

契約のほうが先だとかなに馬鹿げてる」と言つてゐるんだあー…？
俺様がおとなしくしてゐからって調子乗りやがつて…！
すぐに対せ…！」

アシコラはすぐさま私の首根っこをつかんで怒鳴り散らす。

「・・・」

一息で言つものだから部屋にいる全員が唖然としている。
私以外の。

「なにいつてるの？
ばかげてないし、それ。
調子に乗つてもいよいよ。

それに「うやつてる」とじたい時間の無駄だつて放してよ、アシュラ

「アシュラ

私は冷たく言った。

そうこうと、

「アシュラ

”

アシュラの怒りは頂点に達した。

このあと——

「おこつ、いい加減にしろよつ——！
自分で無茶だつてことが分かつてゐへせ
なんでそこまで意地はるんだあ——？
そんなどそこまで言つんならなあ——！強硬手段だ——！」

アシュラはさう言つて私を壁に押さえつけた。

「なつ・・・！？」

私は押さえつけられ驚く。

「おこ、白夜、こいつを眠らせる

「わかった

アシュラは白夜に言い、白夜もそれに応えた。

ちよ・・ちよ・・ちよ

なんでこんなことわれなきやいけないのつ・・・

「つーーー。」

壁に傷が当たり苦痛を顔に出すに入られなかつた。

「我慢できなこじやないか！・・・

だから俺もゼンも薦蛇も言つてこるんだー・・・。」

アシコラが叫ぶ。

するとい――

ペー・・・・

笛の音が聞こえてきた。

「あ・・・・

視界の隅で白夜が笛を吹いてるのが見える。

滑らかで纖細な笛の音は私を眠りへと導くものだつた。

・・ね・・ねむ・・・

・・これは・・なんの・・・・旋律・・?

私は抵抗できなくなつた。

がくん

体から力が抜けた。

すつとアシュラがそれを支える。

「治療している間は・・おきるなよ」

ゼンが私を見下ろしていった。

私は・・それを最後に眠りへと落ちていった。

第一十話 無茶と行動（後書き）

みなさん、お久しぶりです。
これからも地道に進めようと思います。
ではでは。

第一十一話 契約・魔道士・侍女

「う”」

私は痛みで目を覚ました。

「痛むのか？」

そうやって聞くのはゼンだつた。

視界には気を失う前に見た者ばかり。

「・・・べつに」

私はそういう上半身を起き上がるさせる。

そして・・背中にあつたはずの傷を触る。

・・・・。

ちょっと腫れてるけど傷は完全にふさがっていた。

「完治してるはずだが・・大丈夫か？」

アシュラが問う。

「大丈夫。

それより・・あれから―――」

「あれからお前の治療に専念した。
あれからそんなにたつてはいない。
お前は催眠にかかりにくいんだな。」

アシュラが静かに言った。

「・・魔道士だから、当然でしょ。
じゃあ、契約をはじめようか」

私はそう言つて立ち上がった。

「お、おいつ！
ルミーっ！」

後にしてくれ、体力も魔力も回復して無いだろ！？

ゼンが私を抑えようとした。

でも、無駄。

スーーッ

私は指で魔円を描く。

「ハツ！！」

氣を吹き飛ばし、ゼンとアシュラをその円に封じめる。

ゼンもアシュラも身動きの取れない状況に陥った。

「「なつーーー！？」」

「じゃあ、黙陰たち、契約やつひね？」

相手に有無を言わせない私の言葉。

「・・・」

相手は渋々頷いてくれた。

「・・・あれ？

私の魔道具が・・・。

意識の無いうち取り上げたね？ゼン」

私はゼンたちのまつを向いていった。

「・・・！」

ガンガンッ”

結界をたたく音がする。

ゼンたちに私の声は聞こえるが、ゼンたちの声は聞こえない。

そういう仕組みにしてある。

「・・・ちよつとまつてね

私はそう言つて、魔道具を探し始めた。

探し始めてまもなくそれは見つかった。

「・・隠すの下手だね、アシュラ」

私は呟いた。

取り上げたのはゼンだと分かつたが
おいた場所を見るとアシュラの仕業のようだと思つた。

私は魔道具を身に着ける。

耳にピアス、腰のベルトには宝玉。
腕にはブレスレット、そして手袋。

全てを用意して、そのあと、蜘蛛たちと向かい合い、
契約をし始める。

「 - - - - - 」

私は呪文を唱え、手のひらに魔力を集める。

そして、魔力はクリスタルに変化した。

クリスタルは全部で四つ。

ヒュンツ

四つのクリスタルを私は浮かせた。

「蜘蛛、雲雀、薦蛇、白夜、我と契約を交わす。
汝等の名を、クリスタルに今、刻まん。」

契約の証、今ここに在る「

私はゆつくりと契約の呪文を唱え、クリスタルに名を刻んだ。

ヴァンヴァン”

名を刻むと同時にクリスタルは色を変えた。

蜘蛛は紫、雲雀は紅、薙蛇は深緑、白夜は白銀。

そして、クリスタルは契約の下、本人に渡された。

「これで契約は完了。
あとは仲間探しでもどうぞ。
・・じゃあ、ルピナちゃんと久遠君のこと
いろいろと決めようか」

私は言って、ゼンたちの魔円を解いた。

「とりあえず、使う部屋に案内するよ。ついてきて。
・・私の部屋の向かいがいいかな・・

最後は独り言のように呟いた。

そして部屋を出る。

そして案内。

長い廊下を突き進み、私の私室の向かいの部屋まで来た。

その部屋は今は空きとなつてゐる。

「いいでいいかな？

あと、この隣も空いてるから。

じゃあ、入つてみようか

私は言つて私室の向かいの部屋に入る。

みんなも入つた。

中は普通。

質素でなければ豪華でもない。

白い壁に白いカーテン。

ベットにテーブルに椅子に。

まあ、ちゃんと家具はそろつてゐる普通の部屋。

「あ、そつそつ、この部屋は隣の部屋とも扉でつながつてゐるから。右隣は私の自室。私室は主に執務時に使うから。

・・・今はゼンがもしかして使つてる?」

「ああ。使つてる。」

ゼンはきつぱり頷いた。

どうやら私に戻したくないみたい。

「んー、どうしようか、

ルピナも久遠も近い方がいいし・・。

・・こうしよう、私の自室の両隣に一人の部屋を用意するつてのは
?」

「いいんじゃないかな

ゼンがいつ。

「貴方が傍にいるなら、久遠も安心ね」

薦蛇は微笑む。

「僕も賛成。」

雲雀は頷く。

「じゃあ、決定。

としあえず、自室の左隣が久遠君の部屋で
自室の右隣がルピナちゃんの部屋ね」

私は言った。

そのあと一一案内、移動、・・いろいろあつてその辺は解決した。

そして、アシュラたちは仲間探しのたびに出ることになった。

「仲間探し終えたらきてね、

条件はそろえるから

「ああ」

私の言葉にみんなは頷く。

ルピナや久遠は傍にいる。

「ルピナいい子でイテヨ」

「・・・うんっ」

「久遠、私は遠くにいても心は一緒だからね？」

「・・・」

薦蛇の言葉に久遠はこくんと黙つて頷いた。

二人は別れを告げた。

そして・・・神魔たちは仲間探しのたびへ行ってしまった。

「・・・じゃあ、部屋に戻ろうね。」

私は久遠とルピナを促して部屋に戻った。

そして一人を自室に招いた。

「久遠君、ルピナちゃん、
これから二人のお世話をしてもう

侍女を紹介するね。

不安がらなくていいから、ね？」

私はそう言つて二人の肩に触れる。

「・・うんっ」

「

ルピナは私の手に安心したのか頷く。・・が、一方、久遠はびくっと体をこわばらせた。

「久遠君、大丈夫。
私がいるから、ね？」

そう、優しく言い聞かせる。

「・・・」

久遠は私を見て・・黙つて頷いた。

「入つてきて」

私は言つた。

「「失礼します」」

そう声をハモらせて一人の侍女は入つてきた。

「私はロコンと申します。

久遠君のお世話をさせていただきます。」

「私はトパーズと申します。

ルピナちゃんのお世話をさせていただきます。」

侍女たちはそう言って一人と優しく手を握った。

敬語もやめさせようかなーーと不意にそう思った。

「ロコン、トパーズ、

敬語は・・一人に対する敬語はやめてあげてね?」

「「はい、わかりました。」」

二人は微笑み、頷いた。

そして二人は侍女とともに部屋に戻った。

~~~~~久遠の様子

久遠はベットで虚ろな眼をして窓から景色を見ていた。

「食事ができましたよー久遠君」

やつぱり少しは敬語を使うロコン。

「・・・」

久遠はそれでも窓から離れない。

ロコンをみよつともしない。

これは困つたとロコンは思つ。

「久遠君・・・?」

ロコンは戸惑い氣味に聞く。

「・・・いらない」

久遠はテーブルに並べられた料理を見て言つた。

・・初めで言葉を発したのはこれが初めてだった。

「ですが・・しつかり食事を取らないと・・・

ロコンは戸惑う。

「・・・・」

久遠は何も言わない。

そんな情景が数日続いた。

食べた形跡が見られない。

ついにロコンは私に言った。

「久遠君・・なかなか食べてくれないんです。  
どうしたら――」

おろおろするロコン。

「・・わかった。

私が行くよ。そうすれば少しは変わるかもしれないし」

私はそう言ってロコンには下がらせた。

ロコン

とノックしてから入る私。

そして私は久遠の部屋に入った。

「久遠君、・・・。  
大丈夫?」

私は久遠に近づき、久遠の顔を覗き込む。

久遠は虚ろな眼をして窓を見ていたが私を見た。

私は久遠の額に手を当てた。

・・ちょっと微熱だつた。

無理も無い。

ろくに食べず、寝てもいのだから。

私は一つ飴をとりだした。

「これ、食べて。  
美味しいから。」

そういうて、久遠の口元にそっと持つていった。

「・・・」

食べようとしない久遠。

私は片腕を久遠の背中にまわして抱き寄せた。

「えーーー!？」

久遠は驚く。

はじめてみた。

久遠の驚く顔を。

「ほりーー、食べて・・・」

私は久遠に優しく言った。

「」

すると久遠は口を開けた。

そして、口ronと餡玉が久遠の口の中に入つていった。

## 第一十一話 契約・魔道士・侍女（後書き）

途中ですみません。

次回も頑張りますのでお見逃し無く！－

## 第一十一話 狐、三日月の爪痕

久遠は飴を食べてくれた。

それを確認すると

「噛んで粉々に碎いて味わつて。」

私は言った。

自分で言つのもなんだけど  
ゼンやアシユラとの態度はまるつきり違つ。

どつかかというと私はクールを装つていたほつが楽だ。

久遠やルピナに接する優しさは大変。

まあどちらも私に変わりはないが。

ガリッ・・・ツ

飴を噛む音が聞こえる。

しつかり食べててくれたみたいだ。

久遠にあげた飴は私の魔力で調合した栄養満点の飴。

久遠のように警戒して食べ物を口にしない人には一粒でも十分のものだった。

副作用もあつてきっと満腹に感じただろう。

そして・・眠くなるはず。

「な・・・つ

睡眠薬・・いたれた?」

久遠は言った。

私は久遠の体を支えながら

「入れてないよ。

第一、入れても何も得がないでしょう?

それに久遠が眠くなるのはこここのところ寝てないからでしょう?」

私は優しく久遠の頭を撫でた。

「・・・・

久遠はゆっくりと深い眠りに入つていった。

「たくさん・・寝てね?」

私はそう呟きながら久遠を抱き上げる。

久遠の体はまだ小さく軽かつた。

そしてベットに寝かせる。

そのあと、私は部屋を出た。

ルピナの方は侍女と仲良くやつてこらしかった。

私が部屋に入った。

侍女は

「席をはずしましようか？」

と聞いてきた。

「はずさなくていいよ。  
ルピナ、トバーズとの会話は好き？」

私は聞いた。

「うん、好き」

ルピナは明るい声で答えた。

以前と比べてだいぶ明るくなつた。

私と馴れ合つときもないに等しかつたが・・・  
ここまで変わるとは思いもいなかつた。

久遠のように警戒してると思つていたからだ。

「やう、よかつた。

トバーズはルピナと仲良くやれてるのね。」

「はい、始めは難しかつたですが  
ずいぶんと親しみやすくなりました。  
氣があつたからでしようかね」

トペーズは明るくほほえましく言つた。

「よかつた。安心したよ。  
トペーズ、これからもお願ひね」

「はい、おねがいします」

トペーズは快く言つてくれた。

そして私は部屋を出た。

それからまた数日。

久遠も警戒心は解いたみたいでしつかり食事はとり始めた。

相変わらず口数は少ないらしい。

もう少し打ち解けたいと欲を出して私は庭に久遠を連れ出した。

トペーズもよくルピナと庭に出るらしい。

「久遠は・・自然がすき?」

「嫌いじゃない」

「そつか。

じゃあ薦蛇とはどうやって知り合つたの?」

私は久遠と近くのベンチに座る。

「・・・森で蛇と会つた。

いきなり首に巻きつかれて・・死ぬかと思つたけど・・  
それは一瞬で、次の瞬間には人型になつてた。  
それから僕に薦蛇はなにやら説明し始めて・・・・  
それからいつも傍には薦蛇がいた」

久遠は最低限の出会いを話した。

「そつか。

ごめんね、無理やり聞いて。」

私は謝つた。

「なんで?」

久遠は私を見てそう聞いた。

「だつて・・・久遠は・・話したくないでしょ?  
森以前のこととか、どうして二人きりになつたとか。  
出会いだけでもほんとは話したくなかったでしょ?」

「・・・ルミーなら話してもいい。」

久遠はそう言った。

表情はなんでばれたのかつて顔してたけど。

「そ、ありがとう。

でも、今はいいよ。まだ無理してる気がするし。」

「・・・・・? -」

久遠は茂みのほうを見た。

そして驚く。

「狐・・! ?」

私も驚いた。

「久遠・・おいで」

私は久遠の手を引いて茂みのほうへ寄る。

そこには狐が居た。

その狐は後ろ足に怪我をしていた。

狐を見つけた頃、城外は騒がしくなった。

「はやく怪我を治してあげようか」

私はそう言つて治療し始めるが治りが遅く魔力を消耗するだけに終わった。

「クウウウンンフ”

狐は苦しそうに鳴いた。

「ハアツ・・ハアツ・・。  
とりえず・・城に・・・つ！？」

城外の騒がしさは城内へも響いた。

それは九尾の狐が―――というものであった。

たしかにこの狐は一尾のはずなのに私には一瞬九尾に見えた・・。

その瞬間視界が歪む。

グラッ

バタンツ

私はその場に倒れた。

そして・・・

「――ルミー――ツ――!――!

と呼ばれた。

その声に聞き覚えがあつたが私の意識はそこで暗転していた。

## 第一十一話 狐、三日月の爪痕（後書き）

今回も頑張ったけど・・・。

なかなかイトコで終わってしまいます。

次回も頑張りますが。

さて、ルミーを呼んだのは誰でしょう？

次回に答えを出しましょう。ではまたの機会で～  
話数間違えてたなんて私としたことが！（笑）

第一二三話 警備隊驚愕！（前書き）

ゼン視点です。おおっ久しぶり！

## 第一二三話 警備隊驚愕！

今日は久々に外を警備していた。

俺は王の代理（今は一応?）でもあり、兵を指揮する騎士でもあった。

俺の能力も技量も認められたからには外からの信頼も得ている。たまに女性から「ここ恋文などもらいましょうが・・・俺はルミー以外に見向きはするつもりない。

ルミーが俺をどう思つてゐるのかは知らないが俺はそれなりに大切に思う。

そして、城外を見守る兵の一人が

「九尾だ！！九尾がきたぞ！！」

と叫んだ。

九尾！？

こんな辺境になぜ妖怪が！！

九尾とは、九つの秘伝をもつ妖怪、吸血鬼などとは比べ物にならないほど高位の存在。

魔の部族の中でも異端で稀な存在の一つだ。

「うあああああああつ！！」

やられた兵士の叫び声。

九尾はすぐ目の前。

もうすぐ城へ侵入を許してしまつ。

「防備を固めろ！」

結界を強めるんだ！！ルミーの力であとは・・・！？」

おれは九尾を見てそう叫ぶが・・・  
後半言葉を飲み込んだ。

「ヴァアアアアアアアアア」

何の叫びだ。

理解できない九尾の叫び。

「ハアツ！！」

一人の兵士が九尾の前足に矢を打ち込んだ。

「キュウウウンッ”！？”

前足を貫かれ、怪我を負う九尾。

苦痛に歪むそれはまるで何かを求める有様。  
一体何を求めてるんだ。

その瞬間、九尾は光を放射した。

「己を包み、すぐさま姿を消した。

「・・・」

一同、今起きたことに頭が追いついていけない。

姿が消えた瞬間、それは城の中へと入つていった気がした。

「引き続き、この辺りを警備してくれ！  
けが人は医務室へ。代わりのものと交代してくれ。  
俺は中へ行く、後はたのんだぞ」

「はっ！」

俺の指示に兵たちは頷いた。

俺はすぐさま城の中へ。

ルミーに知らせないと・・・！

その一身だった。

九尾がこの城を襲うなんてめつたにないことだ。

あろうことかルミーに忠誠を誓う奴がいたぐらいだ！

・・笑い事じやない、実際いたからな。妖怪の身で捧げた奴が。

そして同時に胸騒ぎ。

城内に何か入つた、それが気がかりでひたすら城を駆け巡る。

そして、庭を通ると・・

ルミーの腕の中を見つかった。

ルミーの腕の中には狐がいた。

「――」

俺はすぐさまそこへ走りつける。

そり、その瞬間だった、彼女が倒れかけたのは。

「……ルミー……！」

俺はルミーの腕を引っ張って腕の中へと抱きとめる。

「ル・・ルミー・・・！」

久遠は少し混乱状態に陥っていた。

いきなりのことでビックリしただろ？

ここは俺が落ち着いていないと。

「ルミー、しつかりしろ――！」

抱き起こし、体を揺らすがそれに全く反応を見せない。

「久遠、落ち着け、

ルミーは気絶しただけだ。

「この狐は……どうした？」

「あ……。

「ここにいた。怪我をしてたからルミーが……。」

俺は久遠の言葉に耳を傾けながらその狐を見入る。

それは一尾の狐だった。

だが・・前足を怪我していた。

・・共通していた。

あの九尾と同じ・・。

「そりか、その狐の治療もするから  
久遠は狐を抱えて、部屋まで運んでくれ。  
ルミーは俺が運ぶ」

「キュウウン！」

狐がルミーを心配してか声を出す。

「大丈夫さ、ルミーは。

久遠・・大丈夫か？」

「・・・」コクン

久遠は頷いたがどうもいつもと違った。  
抱きかかえる狐をぎゅっと抱きしめる。

ルミーはいつも以上に顔色が悪かった。

力を使い果たしたせいなのか、もつと他の理由でか。

「じゃあいくぞ」

ルミーの治療が先だ！

それが思考も感情も最優先だと感じてしまつ俺はこのとき気づかなかつた。

狐が妙に久遠の中でおとなしくしていることにも、久遠が何か言いたげにしていることに気づいてやれなかつたことも。

## 第一二三話 警備隊驚愕！（後書き）

久しぶりに書きました。

うわっ、短いですね。

ちょっと性格も変わってしまった気が・・・。

すいません。では次に・・。

・・いつこうにシンが出てくる気配なし！（笑）

第一十四話 予知する力\*\*にある（前書き）

ルミー視点です

## 第一十四話 予知する力＊＊にある

私はとてつもない浮遊感に襲われた。

「…？」

思わず畳を開けるとそこには久遠と狐の姿があった。

どうやら久遠に渡した部屋らしい。

「…」

う、浮いてる！？

足が床についていない。

どうやら夢を見ているようだ。

そして今見えている久遠たちには  
私の姿は見えない——。

久遠は狐の前足に包帯を巻いていた。

「…なんで怪我なんか・・

久遠は辛そうだった。

「クウウウン」

「えつ僕を・・？」

狐の鳴き声になぜか驚く久遠。

・・会話が成り立つていなのに・・・  
話が通じている・・?

「クウウツ」

狐はなにか久遠に訴えていた。

「えつ・・君は僕の――!？」

ピカ―――!

狐はひかりだした――。

えつなにがおこつたの――

おもわず私は手で光をさえぎった。

そして光りがおさまったあと――

一尾の狐が、九尾の狐へと変わり果てていた――。

「その姿は・・」

「キュウンッ」

「これが本来の姿なの。

久遠クンは私の主となるはずだったのに・・・

久遠クンは・・狐使いの敵、狼使いのやつらに・・記憶を消されて

――

あなたをどこかへやつちやつたんだ――」

「うそだ――そんなの――。

でも、だから君を――大事だと――」

「クウウン」

「だつて小さいころがずっとずっと一緒にいたもん。だから探しに来たの――私には――久遠くんしかいない――」

狐は久遠と思いもしない事実を語っていた。

「キュウクウウウ」

〔敵は契約を邪魔したのあ――！  
だからはやく契約したい――  
はやくしょ――よ――！」

狐はとんでもないことを言い出した――

このままでは久遠が――――――！

「でつでも――いきなりこんなこと――。

僕は・・ツタージャガ・・」

久遠は薦蛇を思い戻惑う。

久遠はおそらく使い手と狐との契約を結んだら――  
薦蛇との関係が――壊れてしまつと思つたのだろう、

おそらく薦蛇が嫉妬で狂つてしまつから。

「敵が来る前にツ！」

お願いッ！久遠クン！！

狐は既にヒトの言葉を使っていた。

より一層久遠にそれを伝えるためだ」と思ふた

狐の事情も分からぬわけじゃないが  
このまつまだと薦蛇のほうが安全だとかぎらない——

その瞬間、瞼が重くなつてきた——視界が真つ暗になつたとき・・

ルミールミーフ！！

遠くで私を呼ぶ声が聞こえてきた――。

גַּעֲמָנִים

私は思わず目を開けた。

「ルミーつ起きたか！」

そこには心配そうに見つめるゼンの姿があった。

「ほんやうどーー

「ゼンーー?」

視界に入るゼンを見つめ私は起き上がった。  
いつのまにか寝かされていたからだつた。

「ああ。

大丈夫か?うなされていたぞ?」

ゼンはいまやつと落ち着いたみたいで聞いてきた。

「ん、夢だったみたいだけビーー」

夢みたいだつた——でもなんかリアルだつた——。

もしかしたら——!—!

私はハツと田を見開いた。

「ゼンつー今狐と久遠つて一緒にーー!?」

「えー?あ、ああ。久遠の部屋にーー」

「なーーー!

いますぐいかなくちやーーー!」

私は慌ててベットから立ち上がり行こうとしたが——

グラッ

視界がゆれ、体がふらついた。

「つー？」

「おいつー！」

倒れる寸前にゼンに腕をつかまれたーー。

「ルミーー？」

なにをそんなに焦つてーー

「それは後でツーーはやくしないとーー」

私はだるい体を力を振り絞つて、

立ちなおし久遠の部屋への扉を勢い良くあけたーー

すると——久遠の部屋は——光で満たされていた！

第一十四話 予知する力\*\*にある（後書き）

おそくなりました。

スマセンー久遠、大変ですよね、ゼンも（^。^）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9471n/>

---

魔道に全てを捧げる魔道士と全てを惑わすプリンス

2011年6月15日20時25分発行